

- 畠老反ニ付 大麦老斗五升  
大豆五升 小麦六升 稔三升
- 田畠中入組高拾石ニ付 銀三百五拾匁從  
下同六百五拾匁迄
- 一田畠烟こやし つのふじ  
げすこへ 相調申候、
- 一田畠烟小作入上ヶ
- 一上田春田預ヶ老反ニ付老石三斗
- 一中田同 預ヶ老反ニ付老石弐斗
- 一下田同 預ヶ老反ニ付老石老斗
- 一下々田同預ヶ老反ニ付老石
- 一上畠同 預ヶ老反ニ付大豆九斗
- 一中畠同 預ヶ老反ニ付八斗
- 一下畠同 預ヶ老反ニ付七斗
- 右之通春下作ニ預ヶ申候へ共當村之儀者水所ニ而田畠共ニ年々惡作仕、無田ニ罷成候義も御座候ニ付、  
毎秋下作人と立会相對之上ニ而免切仕來り申候、
- 一年季質地之事
- 畠老反ニ付 大麦老斗五升  
大豆五升 小麦六升 稔三升
- 田畠中入組高拾石ニ付 銀三百五拾匁從  
下同六百五拾匁迄
- 但し 相對ニ而三年切・五年切又は老年切ニも仕候、  
此外老反切之年季質地ハ無御座候、然レ共毛壳申一  
作壳ニ老反ニ付米老石宛掛り申候、右年數之儀、相  
對之上ニ而仕候段、高下御座候、
- 一御手馬之儀 無御座候、
- 一女義夏者耕作之手伝、冬は布仕候、
- 一男かせき耕作之間草木ヲ取、冬繩俵筵など仕候、  
一名主給米百石ニ付米三斗宛被成下候、
- 一組頭給者無御座候、
- 一但し、村之内ニ而日役少々用捨仕候、
- 一定使給米高百石ニ付老斗五升宛被下候、  
右之外村中ヲたし米不申候、
- 一名主御用ニ付江戸江籠越候義、只今迄無御座候、  
一組頭百姓之義も右同断、
- 一御檢見義者反畠ニ而取來り申、惡作之年ハ小檢見ニ

願上候、雨風無御座年ハ大檢見被成来り候、尤御対

免ニ請申候義も御座候、

一樹木、栗樹少々御座候、壳買仕候程ハ無御座候、

一百姓四壁から竹ゑの木柳屋敷廻リニ御座候、

一山伏老人 同郡宮内村般若院霞下

### 金明院

一行人老人も無御座候、

一鐘扣老人も無御座候、

一こも僧老人も無御座候、

一道心五人内 三人坊主 弐人ひく尼

一座頭井ニゴゼ 老人茂無御座候、

一□多 老人も無御座候、

一くわいらい師 老人も無御座候、

右は当村此度御支配ニ罷成候ニ付御改被遊候、依之田

畑反別井ニ浮役臨時物等其外御改之品々書上申候通、

少し茂相違無御座候、隠置偽り申上候ヘハ如何様之曲

事にも可被仰付候、

宝永三年戊八月十九日

以上

伊豆村庄屋 基左衛門  
年寄 平兵衛  
同断 半右衛門

御奉行所様

同断 平右衛門  
同断 善左衛門

同断 吉右衛門  
同断 武兵衛

### 2 在郷商人

#### 印鑑控

『諸事文言扣』 平尾源太夫家文書

平尾源太夫

小野山善太郎

上田吉郎右衛門

米屋六兵衛

鍋屋惣兵衛

小城村 善右衛門

高柳 重左衛門

鍋屋 六郎兵衛

鍋屋 八兵衛

藏垣村 武右衛門

豊岡町

同押切判

右之人数、文政三辰十月廿三日、印鑑仕候而御上様

江相渡し申候、以上

四七 借用申銀札之事（但、三月元、月壱歩、五月切定）

『諸事文言扣』平尾源太夫家文書

四八 大坂七軒銀主借用額

『諸事扣書帳』平尾源太夫家文書

一銀五百四拾貫匁

一同弐百五拾七貫匁

一同五百貫匁

一同五百貫匁

一同弐百三貫匁

鷗屋

市五郎

687

頭相違無御座候、為後日借用証文仕渡申候、依而如件、

文政四年

巳三月

出石町產物方

出役福富八兵衛

同断

上田吉郎右衛門

同断元方

平尾源太夫

井崎六郎兵衛

同断

六郎兵衛門

由利定平殿

福井勇三郎殿

橋本弥三次殿

四九 鍵屋

『諸事扣書帳』平尾源太夫家文書

平野屋 龍三郎

升屋 作兵衛

鶴屋 小右衛門

六兵衛

市五郎

右者此度無拠入用ニ付、書面之銀札借用仕候處實正也、然ル上者月壱歩之加利足、來五月限り元利共無相違御返済可仕候、為念產物元方出役連印借用仕候上者、毛

一同八百三貫匁

雜喉屋  
於榮一新札產物札此後新ニ御差出被成候義、御無用被成下  
候様奉願上候、

一同六百七拾貫匁

同  
捨松  
筈屋  
勘左衛門

メ年式朱之利十ヶ年

一金銀売買仕候者并ニ他所札通用仕候義、御嚴重ニ御  
差留被仰付被成下候事

新借

一銀六百貫匁

利月八朱、十年賦

新借  
一銀五百貫匁

右同断、

一同三百貫匁

米賃、

右印形仕候大坂七軒屋ニ、

文政九戌二月朔日

一上納締札御通ニ夫々御受取御印被成下、メ札御印形  
被遊候事  
一メ札利足之儀者十二月向々利足書替札ヲ以御上納御  
受取可被成下候事一開封限月并ニ締札何月迄ト申義、被仰付被成下候事  
(文政八年)  
酉正月

御メ札預り人

一町方・山之中

米屋治郎左衛門

一締札銘々封印町方名主、在方大庄屋加印封仕、メ札

取渡、并ニ利息諸拏之義(儀著)名主大庄屋請預り主御用

(儀著)

達之内、其向々ニ而身元慥成者ヘ被仰付候事

一下郷

鍋屋惣兵衛

一銀札ニ而郡々ニ而札高割被仰付候事

同 源藏

一銀札ニ而郡々ニ而札高割被仰付候事

一養父郷

一銀札ニ而郡々ニ而札高割被仰付候事

一銀札ニ而郡々ニ而札高割被仰付候事

一大屋谷

夏梅村 三郎兵衛

一氣多郡

長沢太左衛門

一美含郡

久代勘助



四〇 酒株譲り渡し願書

『諸事扣』 平尾源太夫家文書

万太郎所持之酒株、学次郎譲り候所、久美浜表差出

し御願出候扣

久美浜 御役所

前書之通、相違無御座候ニ付、奥書印形仕奉差上  
候、

森村庄屋 庄右衛門

讀岐守領分

三宅村庄屋 兼帶森尾村庄屋

源太夫

乍恐以書付御願奉申上候、  
一株高三塔石  
一酒造米高七拾石

右但馬国城崎郡森村万太郎、是迄酒造相稼來候処、  
身上不如意相成、酒造難相成、此度相止申候、然処

仙石譲岐守御領分同國出石郡三宅村学次郎儀親類ニ  
付、右酒造株并諸道具とも一式譲受、以後右酒造株

ヲ以、学次郎酒造相稼申度、尤双方村内ニ而茂故障  
之義無御座候間、此段御願奉申上候、何卒右願之通

一 義倉御札五拾貫目

乍恐奉願上口上之覚、

四一 義倉錢札拝借願

『諸事扣』 平尾源太夫家文書

御聞済被為成下候ハ、難有仕合奉存候、依之乍恐双方連印書付ヲ以御願申上奉り候、 以上

但馬国城崎郡森村

酒造株譲り渡人

万太郎

仙石譲岐守領分同國出石郡三宅村

酒造株譲り受人

学次郎

久美浜 御役所

前書之通、相違無御座候ニ付、奥書印形仕奉差上  
候、

森村庄屋 庄右衛門

讀岐守領分

三宅村庄屋 兼帶森尾村庄屋

源太夫

右者私共加印仕御拝借被仰付度奉願上候、尤御規定之儀者被仰付通如何様共可仕候間、右之通り被仰付被成下度、偏奉願上候、以上

平尾源太夫印

天保十五年辰年九月  
義倉  
御役所

御役所

### 圖二 約定証文

『諸事扣』平尾源太夫家文書

今般錢札三拾貫目貸渡其許、加印之上融通有之付、

左之通致規定候事

一当辰年カ來ル申年迄五ヶ年之間、錢札加印之上引替融通筋聊差支無之様可被取斗、尤引替之(義)者其許加印札ニ而も於役場引替遣し付、右引替為手當金貸渡し置候、銀高江三割方正金差出可被申事

一加印札散札之多少ニ不拘、貸渡し候分ハ者年五朱之利足可被相立、尤每年七月十日・十二月廿日兩度可被相納候事

印札ニ而も於役場引替遣し付、右引替為手當金貸渡し置候、銀高江三割方正金差出可被申事

但し、錢札壹匁正錢九拾文遣ニ相定、金壹両ニ錢札七拾三匁六分七厘之積ヲ以引替融通可

有之事

一加印札三拾貫目貸渡候上者本人カ請人方ハ慥成引当受取置、當請人共所持之田畠之内、別紙証文壹通慥ニ預り置、萬一本人及不埒候共、不拘本人請人カ急度勘定有之、若勘定合及延引候ハ、証文面之地所可被引渡候事

其許加印札當方引替場ヘ差出候節者引替置、毎月五日正金ニ引替可被申事

但し、毎月封札員數廿五日ニ鄉宿迄為知被置可申事

一年限相濟候上者貸渡候錢札取揃可被相納、散札ニ相成、年々難入分者孰々加印札ニ而も取足シ可被相納候、右ニ而も不相揃分者正金銀ニ而可被相納候、散札之分追々引替ニ差出候ハ、其節正金銀相返し可

申事

前書之通規定之上、錢札貸渡候、然ル上者聊差滯不申  
様融通可有之候、為後日規定証文仕渡し申候、仍而如  
件、

天保十五

辰年九月

四三 坪居村庄屋三郎右衛門覺書

岡本久彦氏所蔵

文化十四丑年十二月

一十二月十三日

御用□　岩田静馬様、御膳番ハ大塚甚太夫様、御  
目付ハ太田忠兵衛様、御殺生小頭野田源八殿以下御  
供目付横川今右衛門殿、御茶道中村与斎殿、御供御  
鳥見宮城定七殿、右御茶道の御茶代銀壱両頂戴仕候、  
御帰り之節ハ御見送仕候、翌十四日出町仕、御礼申  
上候ハ岩田様大塚様一柳様太田様御供目付并御鳥見  
野田氏御茶道へ御礼申上候、

一 同十二月廿二日御野合有之、私宅へ御腰御掛被成下  
候而宮内寺鏡へ二帰り被遊、後之御出ニ雉子一羽被  
遊候而又私宅へ御帰り、今日者御昼休ハ桜尾御茶屋  
ニ而私宅御立之節、当村御鳥屋の御注進ニ付御出被  
遊、ふくろ一羽御手ニ入、夫々桜尾江御帰り被遊候、  
今日御側御用人ハ大森登様、御目付者高山定右衛門  
様、御膳番ハ□村勇様并一柳弥□　御供下目付  
横川今右衛門殿、御殺生小頭野田氏、御茶道は中嶋  
良賀殿、御鳥見ハ宮城定七殿、今日も御茶道の御目  
録銀壱両被成下候、御見送り仕候、明ル廿三日御礼  
□鴈一羽被遊、都合四羽□　□有之候、此節御側  
西谷御鳥屋へ御出雉子□　□被遊大庄屋殿宅へ御□

ニ罷出御側御用人様御目付様御膳番様御側一柳様野  
 田氏御供目付御茶道へ御礼相勤候、西谷御鳥屋ニ而  
 ふくる御打被遊候と承り候處、跡ニ而承り候得者雉  
 子三、四羽出候故、御注進有之候處、殿様御鳥屋へ  
 御入被遊候と否、鷹出雉子追立候故、御鳥屋より御立  
 出被遊候處、彼之鷹幸ひニ御近所之木ニ懸候故、被  
 仰付野田氏、彼之鷹打取被成候由、野田氏御礼ニ参  
 候節、被申聞候事

一同年大手度々御出有之候ニ付、御鳥見衆御使ニ而御  
 鳥屋下代被成下候節、野田源八殿より銀壱両被成下候、

則野田氏江請取書出シ申候、御鳥屋下代ニも受取書  
 右兩通共源八殿宛所ニ而請取書出シ申候、口口右

御出之節之通、年詞之席而ニ申上候、

一文化十五寅年正月九日

殿様私宅江御腰御掛被成下候處、去冬も兩度御懸被  
 遊候へ共何も献上不仕、当春御初御出旁ニ付身之冥  
 加、差上物仕度ト御目付横川今右衛門殿へ相伺ひ候

処、御伺ひ被下候處、只今ハ御用人様御居合せ不被  
 遊、御星之節否知らせ可申との御事ニ而、市郎右衛  
 門殿方御星ニ而是も差上候様御知らせ被下候故、さ

鉢ニ杉原式枚敷、たまこ三十台ハまる盆足有ニ乗せ、  
 山のいも廿本斗足有丸盆ニ杉原二枚敷のせ、右二品  
 差上候、御茶道中村与斎殿御取継ニ而御受納被成下、  
 其後私共玄関之間へ御呼上ニ而度々之御出彼是心遣、  
 今日ハ上ヶ物いたず、依之是を被成下とて、銀式両  
 被成下、冥加至極難有頂戴仕候、右ニ付翌日十日御  
 礼ニ罷出候、(中略)

一右度々御腰懸り候ニ付、かららひへりのまくり式枚  
 致候、

一新舗御手水皿并しやく一本買調へ致候、

一まくり表四枚代 五匁式分

一へり木綿ハ有合 へり染代

一御手水たらる壱ツ代 金壱匁四分五厘  
 一しゃく壱本代 壱分式厘

一まぐり手間代 壱匁四分

一献上物たまこ二、三十山のいも二品代 五匁八分

一今右衛門殿・源八殿江看遣候、壹匁宛故、貳匁

一御腰被掛難有段御礼御代官様江も申上候、

一十日御礼ニ罷出候節、昼夜町宿賄も村入用ハ不出

サ、自分賄ニ仕候、

(正月十一日、同二十一日御出ハ省略)

一同廿五日御出、御腰御懸被成下候、御刀掛致候代三  
匁五分、今日御目付ハ西山善右衛門様御鳥ハ宮城定  
七殿依田庄八殿、源八殿ハ見ヘ不申候、昨日之御出  
之処ニ御鳥屋之上辺山江嶋村之者落葉ひろひニ参、

御鳥見衆ニ見付られ、御鳥見庄八殿ニ如何と被申候  
故、当村迄ハ決而左様之者ハ不參候、夫レハ定而嶋  
村之ものニ而御座可有候と申答候、然る後、下目付

今右衛門殿迄先刻御鳥見迄相尋候儀、甚六ヶ敷事之  
様被存候趣被申候故、甚恐入候仕合ニ御座候、何分  
宜く御取合セ可被下段、頼置申候、

翌廿六日嶋村迄使を以、役人衆迄被申越候者、昨日  
ハ村方之者甚恐入候ニシテ仕候ニ付、昨晚早速ニシテ  
被下候故、八右衛門殿ニ江詫ニ被參、于今帰  
りニシテ何分御堪忍被遊被下候様、御取合セ頼候  
と之口上ニ候、此方返答ニ彼是御心配氣之毒之事ニ  
存候、以来御村方へ得斗々々御上を恐れ候心得を御  
談シ可被成、併御案事被成間敷候と返答申候、右程  
之儀故、当村支配地之内之事ニ候得者此方迄も源八  
殿江談申、可然と存候故、私廿六日源八殿江参、昨  
日ハ甚以恐入候仕合之義御座候、何分宜く御取合セ  
御聞済被成下候様奉頼段相願候ハ者、未た此方ヘハ  
沙汰無之候ハ共沙汰有之候ハ、宜く取合セ可申候間、  
左様心得可被申と御申被下候事(中略)

#### 日記

一親三郎右衛門義、寛保三年当村庄屋役蒙 仰候、  
一宝曆三酉年御用銀御領分江五千両 被仰付、下郷江  
貳拾九貫五百貳拾三匁懸り申候、(中略)

一宝曆四戌年十二月薪之直段上干・中干・生夫々之直  
(直以下同)

一段被仰付候、

一宝曆五亥年 若殿様御誕生被遊、御名被為付候、

御祝義(儀以下同)として御領分江御祝井下郷江銀三枚被成下、

此銀札百三拾壱匁五分、此内五匁宛兩大庄屋殿江進上致、残り百式拾壠匁五分兩組割合當組江六拾九匁壠分當り申候、

一宝曆七丑年貢霜月十五日限り皆済仕候様、被

仰付候、

一同八年寅正月、去年御年貢霜月十五日限り皆済申付候處、定之通皆済致、尤之儀、依之御褒美として御領分江御米四百石被成下候、(中略)

一同十二年貢御物成、人別二判形取帳面認差上候様、被仰付候、

一御國役人足、組合中物高割ニ致來り候處、高百石二付七拾人請と申儀相究候ハ、明和元申年貢同六年丑年之間ニ究メ候と相見へ候得共、何年貢と申事、今

以難相知候、(中略)

一明和九辰年江戸大火、此方殿様上下御屋鋪御類焼、

依之御領分中として千両差上候、御普請之節ハ當國の御材木等御廻シ并大工木挽等江戸へ御呼寄、(中略)同年御年貢出石御藏入之分、米大豆共斗切俵ニ而御藏入仕、込米込大豆之分ハ別ニ俵ニ仕、御上納致候様被仰付候、又込米大豆之分ハ別御直段被仰付、銀納ニ致候事も御座候、

一同年烟作悪作ニ付、御歎申上候處、伊豆・福居・

嶋・宮内・坪井・安良・六ヶ村又鳥居・尾崎・森井・中谷・丸谷・大谷・田立・七ヶ村合十三ヶ村へ銀式貫匁被成下、初六ヶ村ハ大豆老石ニ九匁四分壠厘五毛当り候、次之七ヶ村ハ八匁五分五厘頂戴仕候、一安永四年、大豆方江御赦として御米式拾石被成下候村数ハ嶋・福居・丸谷・中谷・森井・尾崎・鳥居・田立・宮内・坪井十ヶ村ニ而大豆御物成辻ニ割合、当村江御米六斗四升壠合頂戴仕候、

一 安永五年春、八十以上老人江長命御祝井、九十以上江ハ老人江銀壺兩宛被成下、八十以上ハ御郡々不残老人江銀武拾枚被成下、一人江七分三厘□八五頂戴、御書付も出申候、

一 同年あぢ山柿谷と申谷迄、御城山下刈望之者江被成下候、鎌刃之時ハ老荷拾六文、山刀刃之節ハ老荷廿四文宛ニ而被成下候、(中略)

一 安永六年冬宗門御改帳、一宗一冊ニ認候様被仰付候、(中略)

一 安永九子年正月、去冬殿様御家督、御祝井として金子千疋、昆布拾把、鰐拾連、御酒代被成下、銀札ニして当組江九拾武匁五分五厘当り、当村江老匁七分八厘頂戴、正月廿六日男女休日致頂戴ニ呈し致し御酒三升五合調ヘ、肴ハ鰐を焼、大こんおろしニ而頂戴、

一 同年三月十九日、出石御泊り御本陣下吹田屋ニ而京都西本願寺御門主御入湯、坊官下間少進、御家老嶋

田帶刀、御供人數凡四百人、御先荷拾老駄、長持等ハ十九日豊岡光行寺届、人足宰領凡六百人、下郷氣多引請、御上湯四月十七日丹後廻リニ而又出石御泊り、養父郡へ御通り、

一 同年八月十九日、実相院殿様御一周忌ニ付、御施行被成下候、御命日ハ八月廿四日、(中略)

一 天明元年同年天明元丑五月廿七日兵部少輔様御入部、右ニ付、閏五月七日御領分名主大庄屋端町庄屋御領分村々庄屋於御殿ニ御目見被仰付候、大庄屋御用達之分ハ扇子御熨斗献上、小庄屋之分ハ鳥目武拾貫文献上、名主大庄屋御用達之銘々ハ上ミ下モ、小庄屋之分ハ羽織袴脇差、但シ、脇差ハ供之ものニ御玄関ニ而持セ無腰ニ而御目見仕候、

一 同年当組合大庄屋口小野村西村助太夫(旧名弥兵衛)殿六月廿六日死去、勤役十四年、

一 同年六月晦日、助太夫殿跡役、宮内村儀右衛門殿江大庄屋役被仰付、則市郎右衛門殿と改名、

一同年八月、殿様御初入ニ付、長寿孝人御祝井被成下候、孝人江ハ御米壹俵、九十六歳以上之者江ハ銀武両宛、其以下九十歳迄ハ壹両宛、八十歳より八十九歳迄江ハ御領分一同江銀武拾枚、夫婦共八十歳以上ニ而罷出候者ヘハ壹両宛、八十以上ニ而養もの無キハ生涯御米壹俵宛年々被成下、又誰抱と申者ヘハ抱主ニタ養ふとハ乍申、生涯中御米武斗宛、八十以上ニして男子なく女子斗持候もの江ハ生涯是も武斗宛被成下候、右夫レ々々江御書付被成下候、

一同年春、去年凶作ニ而穀物高直、村々難儀ニ付、作喰願候處、御上ニモ御払底故、麦稗御貸被仰出候處、下分申上候者右難渋故、引々を以雜穀ハ少々心當仕候ヘハ、何卒御銀子押借可被仰付様、奉願候得共、詰ル所麦稗押借ニ相成、伏御藏ム押借仕候、返上之節ハ代銀ニ而御返上仕候、然ル處遠國ニ御買取被遊候故、何角懸物も有之、麦稗石代銀四拾三匁八分武厘直、稗壹石代銀武拾四匁六分武厘直ニ而御座候、

一同年八月、出石銀札賜致候者、宮内番人雲平見顯シ召捕、生國大和奈良之者之由、翌年江戸江引連候、

一同年十二月、出石御學問所御成就

一同年八月、桜尾ニ御家中屋舗建、

一同年三卯年、御施行米として御領分江御米百俵被成下、高割ニ被仰付、下郷江拾八俵壹斗当り、当組江拾俵壹斗五升当、尤村方極難之者へ遣し候様との儀

一而難義人斗江頂戴為致候、当村江八升当、

一同年三月十五日、一宮社御鳥居斧始、

一同年四月六日より宮内總持寺ニ而結衆中として弘法大師九百五十年御忌、五日之間經会御勤、

一同年六月末より信州淺間山大燒、七月六、七日頃ニ者焼ニ而此辺迄聞ゆる、

一同年八月廿二日見開山相撲中絶之処、当年より先規之

通相撲初る、

一 宮社九月御祭礼ニ先前より若もの狂言踊致來り候處、八年已前安永五年より、當天明三卯年先年之通

願候得共不叶、子供ニ笛踊御免、

一 同年殿様勢州尾州濃州川之御普請御手伝被為蒙仰候ニ付、御機嫌能御勤被遊候様ニと御領分中として於

一 宮社ニ御祈禱仕、御札差上候、

一 同年暮、銀納御直段米八拾弐匁直、大豆六拾七匁直ニ而候、

一 同年十二月、近來凶作別而當年惡作ニ而村々より非人多く出、依之出石新橋ニ非人小屋御上より建、

一 天明四辰年三月、麦拌借仕候而、當村ニも壠石拌借、

一 同年時疫流行致候節之薬法、又喰あたり之薬法御知らセ之御書付被成下候、

一 同年穀物高直米壠石九拾三匁、店壳壠匁ニ付壠升壠合五匁、

一 同年三月廿一日弘法大師九百五拾年御忌相当、

一 同年穀物次第ニ上り米一匁ニ付九合、壠石ニ付五拾五匁、小麦八拾匁、小豆壠匁ニ付五合、五月御小物成御直段銀百壠匁直、

一 同年八月朔日大風、

一 同年十月丹後久美浜強訴ニ付、同九日夜十日明方出石より御加勢、一番手御出御物頭平士御目付御侍数多弓鉄炮、何れも騎馬高張幕其外御備道具品々御持參、誠ニおひたたしき御事、二番手も十四日ニ御出、

一 同年十二月五日、親殺し養父郡仲間村長右衛門と申もの河原町口御仕置場ニ而はり付ニ御成敗、

一 天明五巳年三月、稻作ニ虫付不申呪文文字并致方、御触有之、御用帳ニ留置候、

一 同年十月、江戸板本町辻伝次郎代上原正藏と申もの、御種人參壳弘メニ参、村々順村致候、尤公儀より御触有之、御領主より御触、

一 同年十一月、奥州仙台ニ而角錢鑄出し候へ共、仙台御領分斗之通用ニ而外ニ而通用仕間敷との御触、

一同年九月十六日△殿様御病氣、御養生不被為叶終ニ  
御逝去被為遊候段、十月十四日御触、後日承り候へ  
者御命(日脱力)十七日

右御病氣之様子承知奉恐入、依之御領分中として一  
宮社ニ而二夜三日之御祈禱相頼、御札差上候、并下

鄉兩組として別段總持寺相頼二夜三日護摩炊御祈禱  
致御札差上候、扱又御逝去と被仰出候得ハ人夫等御  
用ニ候ハヽ可被仰付段申上候、十月廿二日經王寺

江御葬送、同廿七日御施行可被成下御触有之候、  
一同年十二月十四日、若殿様御家督被為蒙 仰候、

一天明六年二月五日、出足ニ而御家督御祝儀ニ江戸

發足、町方惣代ニ名主吹田屋市左衛門殿、在方惣代

ニ大庄屋鳥居村新兵衛殿、同坊岡村弥吉殿御出、此

入用銀武貫百七拾弐匁、此割合下鄉兩組へ銀武百三  
拾七匁五分六厘当ル、当村江四匁八分懸り候、町分

ハ又別也、

一同年四月、殿様御家督御祝井として御領分町在ヘ御

酒代被成下、下郷ヘ御酒代千疋、昆布拾把、鰯十連  
被成下、此銀札百六拾五匁之内當組江五拾三匁七分  
五厘当リ、当村江壹匁八分当、是ニ足シ致御酒三升  
五合調ヘ、四月十九日休日ニ致し、燒鰯肴ニ而男之  
分不残頂戴仕候、

一同年六月、寛文二年以來之宗門帳御吟味、(中略)

一同年九月十四日大慈院様御一周忌ニ付、大橋ニ而御  
施行被成下候、

一同年十一月当年畑方凶作故、御慈悲筋願仕候處、畑  
方江ハ御憐愍と申義ハ無之、併難儀之段ハ御察し被  
遊、畑方江御心付と申ニ而者無之候得共、被成下迪、  
御米拾八石宮内ニ香住迄七ヶ村ヘ被成下、大豆納辻  
江割合、当村江壹石七合頂戴仕候、

一天明七年四月頃、出石經王寺院内ニ日月星之三星崇小社  
建立、

一同年四月頃、出石經王寺院内ニ日月星之三星崇小社

一 同年五月、御小物成御直段、九拾九匁直、

一同年大慈院様御三回忌ニ付於大橋ニ御施行、尤此節

穀物高直ニ付七月十日ニ被成下候、

一同年播州江州勢州都而東海道筋大水大風、依之米直

段上方百武拾匁百四拾匁迄、当國三月頃九拾武三

匁迄仕候、右之通りニ付夏分古今之ききん、

一同年カ綿目上納之節、一組カ正綿老把宛上納仕候様

被仰付候、

一同年御年貢御勘定之節、御私切直と申儀相止候、且

又大豆銀納仕候得ハ石五分除と申、御直段之内ニ而

五分相除、大庄屋元ニ預り候様ニ被仰出候、

一天明八申年正月十五日、市場村伊右衛門殿・大庄屋

格森尾村源太夫殿御米六石永く年々被成下候段仰付

候、三宅村庄屋宗四郎殿・袴狭村庄屋善太夫殿・上

鉢山村庄屋六兵衛殿三人江金子武百疋宛被成下候、

口小の村庄屋助太夫殿・同村長右衛門殿兩人江御上

ミ下モ被成下候、田多地村庄屋定四郎殿・森尾村源

藏殿兩人江ハ御料理被成下候、

一同年正月晦日、京都大火、内裏仙洞御類焼、大風故

焼ほこり此辺迄參候、古今之大火、死人等有之、火

出され人々縁々を求、近国他国江追々參候、

一同年二月十四日昼頃カ南之方カ風吹出し、十五日昼

頃止、大風故倒木潰家数多御座候、

一同年二月廿二日カ廿八日迄一七日之間、五穀成就御

祈禱、一宮社ニ而被仰付候、右同日カ一七日之間愛

宕社ニ而火防御祈禱被仰付候、

一同年三月四月之内、荒地段免新発御改御見分、四月

廿二日下郷兩組相濟、鳥居村カ御奉行様御引上、御

目付竹村十学様・御免方中村又太郎様・御地方平野

喜兵衛様御出懸宮内村、

一同年五月廿六日、御巡見御奉行丹波上佐々木村方弓

御出、出石御泊り、松平惣兵衛様御宿吹田屋藤兵衛

殿、中根半兵衛様御宿鍋屋六郎兵衛殿、山岡伝十郎

様吹田市左衛門殿御宿ニ而豊岡江御通り、御通り筋

ハ不及申、其外村々書上帳有、

一同年六月春以来時候不順ニ付、此上順氣宜作方潤熟致候様ニと、御郡々神社ニ而五夜五日之御祈禱被仰付候、

一同年七月廿三日より四日川原町口六地藏ニ而、出石如來寺忍營和尚百年忌追善、如來寺乃御勤、

一天明九酉年正月廿二日、森尾村庄屋源太夫殿退役、子息治郎右衛門殿江跡役被仰付、名源治と被改候、同日安良村庄屋役弥右衛門殿、孫龜松殿江被仰付候、一同年正月、殿様御機嫌能御目見被為遊候、御祝井として町方へ餅米拾俵、在方へ五拾俵被成下候、尤下分々も御祝義差上可申様申上候へ共、御断ニ而不差

一同年三月十一日、田多地村川替御普請願ニ付御見分、一同年四月より照繞渴水、依之一宮社ニ而雨乞御祈禱、妙見社ニ而右同断、出石惣山伏衆當村法安寺池ニ而雨請被仰付候、此辺植付漸々六月十一日ニ相濟候、苗節(ツコ)不上仕用等御触有之候、

一同年六月廿五日、江戸升改役人桶屋藤右衛門代川口仙右衛門、鈴木林蔵と申者出石着、順村致、升相改可申と先触出シ、宿田結庄町岸田屋庄左衛門ニ而懸合相濟、村々少々宛升求候、壹合升代銀弐匁五分、五合升銀三匁七分、壹升升銀五匁八分、斗升銀三拾七匁七分直段、当村ニも壹升升壹匁、壹合升壹匁求仕候、

一同年二月十一日、宮内坪井番人雲平と申者、積悪ニ

而死罪被仰付、妻子追放、

一同年二月廿一日被仰出、年号寛政と改元有之候御触、

一同年三月七日、市場村伊右衛門殿當組合大庄屋差添役被仰付候、

候、

一 同年八月、尾崎村善立寺突鐘、京都迄下ル、

一 同年八月廿三日、宮内坪井番人雲平相果候後、無之

處、今日伊八と申番人参、目見ニ参候、

一 同年九月朔日、伊勢内宮御遷宮、四日外宮御遷宮、

一 同年九月三日、丹波福知山殿様朽木隱岐守様御入湯、

出石御泊り吹田屋藤兵衛殿、四日御舟ニ而御下り、

廿五日御上り、出石御昼久烟御泊り、

一 同年十月廿八日、荒木頬母様御死去、

一 同十一月十八日宮内組ニ而八ヶ村、鳥居組ニ而四ヶ

村都合十二ヶ村、申年荒地見分之節、地所明白申談

行届候御褒美として、右十二ヶ村江鳥目拾貫文被成  
下、一ヶ村江九匁八分宛、当村も其内ニ而頂戴仕候、  
一此節大坂堺筋大火之由相聞申候、

一 同年十二月荒木頬母様御死去ニ付、荒木平学様御跡

取、御名帶刀様と御改、

一 米大豆共銀納仕候へハ五分除と申儀、天明七未年々

除候得共、いつとなく止り候、

一 寛政二戌年、去酉年御物成付夫銀付帳面差上候ニ、

当春ニ米大豆共銀納有之候ハ、人別ニ銀納を記差上

候様、当春ニ被仰付候、

一 同年工藤市郎右衛門様江御地方被仰付候ニ付、大庄

屋宮内村市郎右衛門殿當分市良左衛門と被改候、

一 同年正月廿六日、養父郡大庄屋納場村佐右衛門殿願  
ニ依而御役御免、一代大庄屋格帶刀御免、跡役藪市  
場村久兵衛殿江被仰付候、

一 同三月七日、香住庄村屋文右衛門殿庄屋御役御取上、

過料被仰付候由、

一 同十八日、袴狹村谷外稻場おり口ニ田多地山御目當

ニ火矢鉄炮此辺ニ而初而御稽古、

一 同廿一日ニ一七日之内、於一宮社ニ五穀成就御祈禱、  
秋葉社ニ而火防御祈禱被仰付候、

一 同年八月廿五日、一宮社梁太鼓両村子供中として仕

候而今日京ニ下着、代銀七拾五匁、

一当村組頭市兵衛死去ニ付、繼役九月十日治郎兵衛江  
被仰付候、

一同年十月九日、内町御会所江御移り、以来御勘定所  
と唱ハ申候様被仰付候、

一去ル申年、京都大火、内裏御同様ニ付正護院宮ニ皇  
居之処、当年新内裏御成就、十一月廿二日御遷幸、

一同年十一月廿七日、殿様御叙爵被為蒙仰、御官名越  
前守様と御改名被為仰之段御触、十二月十二日御触  
有之候、

一同年四月、江戸升役所丹波船井郡園部町小林忠太夫  
と申者方ニ而、以来升望之者者求候様江戸升役所  
触有之候、

一寛政三亥年正月、荒木帶刀様御死去  
一同年三月十二日、香庄村庄屋文右衛門殿帰役、  
一同年四月八日、出石高徳寺鐘鑄宮内久保谷ニ而有之  
候、

一同年五月八日、殿様御入部、

一同年五月十九日、名主大庄屋御用達端町庄屋在々庄  
屋於御殿ニ御目見、名主大庄屋御用達端町庄屋ハ紋  
付帷子上ミ下モ、御熨斗扇子一箱宛献上、御領分小  
庄屋之分ハ紋付帷子羽織袴、献上ハ鳥目耳白武拾貫  
文差上候、但、是ハ拝借ニ而相済、并席夫レ々々有、  
在方小庄屋之分ニハ下郷上席、下郷之内ニ而も當  
組合上席先格ニ而御座候事

一同年五月兼而被仰付候反別帳漸々認当村ハ差上申候、  
一同年早稻中稻稲毛訣帳面認、当年六月中ニ差上候

一同年八月朔日綱引と申事、出石町方ニ而ハ中絶之処、  
願ニ依而当年ヲ初る、

一同年九月十一日、丹波笛山殿様青山下野守様御入湯、  
出石御泊り吹田屋藤兵衛殿、十二日御舟ニ而御下り、  
一同年下鉢山ニ穀留御番所建、

一同年九月廿六日、豊岡大殿様御國御隠居ニ而御着、

一同年十一月、殿様御初入ニ付、御先格ハ無之候へ共、

御領分江御酒料被成下、下郷江銀三枚被成下、当組  
江七拾三匁三分当り、当村江壱匁四分壱厘当り、此  
内式分ハ宮内と一処ニ壱匁式分一宮社江差上、残り  
壱匁式分壱厘ニ足シ致御酒式升五合調ヘ看ハゞまめ  
ニ大こんおろしひ而、十一月廿一日男女休日、家主  
老人宛庄屋宅江参、頂戴仕候、  
一同年五月被仰出、去亥年閏東表方被仰出、穀物類其  
外下直ニ壳候様被仰出、近年ハ米石も下直ニ相成候  
ヘ共、其以前米石高直之節之様、諸色高直ニ而下直  
ニ不致、此度諸色下直ニ壳物致シ候様、町方江申付  
候、在方之儀も左様相心得候様、被仰付候、  
酒之事、名酒壱匁壱分五厘、上壱匁、中八分五厘、  
下七分、糀之事、五月迄八月迄(續以下同)清米一升ニ付もミ糀  
壱升、水走り米一升ニ同九合、水つかり米壱升ニ付  
同八合、九月迄翌四月迄清米壱升ニ付もミ糀壱升壱  
合、水走り米壱升ニ付同壱升、水つかり米一升ニ同  
九合、

綿打錢、二月迄十月迄壱分九厘、十一月迄翌正月迄  
壱分七厘、豆腐壱丁代八文、但、大豆直段無差別、  
已来定直段、

酢、味噌、醤油、右三ヶ条ハ石物之義ニ付、酒直段  
ニ准し直段引下候事

紺屋染物直段・柄巻・塗師・細工・仕立物手間代・  
乗物師手間代・鋸物師・鍛冶屋・研屋・合羽屋・紺  
物細工・蠟燭代・鎌屋手間・干菓子・畳新床、右十  
四ヶ条ハ去冬出差出候直段ニ壱割引、  
呉服類、薬種類、小間物、荒物其外都而諸壳物、是  
迄壳來り候直段ニ一割引、

去暮御払米石別平均銀札四拾六匁式分式厘壱毛、

一寛政四年二月五日、御領分孝人老人江御初入御祝  
井被成下候、御先例之通、其品段々有、是ヲ略ス、  
一同年閏二月二日、長砂橋是迄土橋之所、当年板橋ニ  
被仰付、今日成就、

一同年二月三日宮内總持寺築地石垣成就、

一同年閏二月九日、殿様御吉例之御鳥狩、勢子三千人  
山之中口組・町分・町役・下郷・氣多々出ス、殿様  
御昼休片間村六兵衛殿宅、御上ミ下武具、金子五百  
疋被成下候、

一同年三月八日、豊岡養源寺梶原村ニ而鐘鑄、  
一同年根付頃、照統、植付難成所々雨乞、  
一同年六月十六日、森尾村源太夫殿大庄屋格帶刀御免、  
御用達上席と被仰付候、

一同年七月九日、豊岡殿様御隠居様、御在所御隠居之  
処、御逝去被遊、今日乃御停止触、  
一同年七月廿日之御触ニ殿様先月廿七日御婚礼有之候  
との御触、

一同年十月十二日、豊岡殿様御入部、

一同年十一月廿三日、京都迄小野川と申大角力出石江參候、  
一殿様御婚礼御機嫌能相済候、御祝儀ニ御領分々米百  
俵差上可申と申上、其趣江戸表ニ而達御聽、御満足

一同年三月十一日、数多之御人数御役替、御郡支配御  
被為遊候へ共、御断ニ而御受納ハ無之候、  
一寛政五年丑正月、市場村伊右衛門殿当組添大庄屋被  
仰付、其後本役同様ニ相被勤候様と迄被仰付候処、  
此度願ニ依而御免、

留役杯と申御役名被仰付、御代官と申御役名ハ止り候、

一 同年四月二日、豊岡光行寺鐘鑄有、

一 同年五月廿八日、遊行上人丹後宮津々出石着、六月六日豊岡光行寺へ送付、人足凡七百五拾人、

一 同年五月之被仰付ニ、年中御小物成帳二人別小前印形取置候様、當年々被仰付候、

一 同年閏十一月十三日、田多地村惣反別地向御見分として、御奉行様六頭御小役、彼は御上下拾四人今日御出鄉、御宿善光寺、

一 同十五日森尾庄村屋源藏殿江被仰付候、

一 寛政七卯年正月廿九日、立石庄村屋惣右衛門殿江被仰付候、

一 同年三月朔日、出石福成寺火災後再建成就、棟上、

一 同年々宗門御改、寺院判・人別判一日ニ被仰付候、

一 同年四月九日、信州善光寺如來先年御順國々九十二ヶ年來ニ而此度御出、昌念寺ニ而五日之間御開帳、

一 同十九日明六ツ時頃宗鏡寺焼失、

一 同五月十九日森尾庄村源藏殿御用達并御上ミ下拝領、

一 同七月廿八日、袴狹村かやが谷ニ而御物頭様方并組子御足輕衆、陣之御備へ被遊、弓鉄炮を打御稽古初而有之候、

一 同八月三日、上鉢山庄村屋六兵衛殿願ニ依而御免、後役十助殿江被仰付候、

一 同九月一宮社御神事、去年迄笛踊致候得共相止、當年々御供式斗致差上、湯立相濟と御神前々まき候ニ而御祭礼仕舞申候、

一 同十二月八日、口小野庄村屋助太夫殿御用達并ニ被申候ハ、当春御救米として御郡中江御米五百俵被成

下、つかミ割ニ而下郷両組江百俵当、此内ニ而水上・長砂江三俵配分致、残り九拾七俵是を二ツ割当組江四拾八俵半俵当り、組合極難之者式拾人有之、壱人江壱斗宛、為致頂戴、残り拾七石式斗組合貯ニ致候、今之義倉之根元ニ而御座候、則正米ニ而被成下候、

一同年二月、立石村庄屋惣右衛門殿退役、則子息甚次郎殿江後役被仰付候、

一同年四月五日迄九日迄五夜五日之間、於一宮社ニ五穀成就臨時御祈禱被仰付、所々神職方御出、賑々舗御祈禱、

一同七日迄九日迄御城下并御郡中為靜謐之火防御祈禱二夜三日、愛宕・秋葉両社ニ而被仰付候、

一四月廿八日、水降、奥野市場辺鎌田谷麥穗打落、麻綿皆無ニ成候、氷溜る事式寸斗、懸目一粒十五匁より式拾匁位、

一同九月一宮社御屋(銀以下同)被破損ニ付ふき替、屋根屋札入ニ

致候處、出石八木町利左衛門壱貫四拾五匁ニ落ル、

一同十月十四日迄於經王寺ニ手嶋流道二先生道話講釈、

一同十一月十一日、一宮社御屋称ふきかへ斧始、

一同十二月廿九日、森尾村庄屋源藏殿・坪井村庄屋三郎右衛門御勘定所へ被召出、今般組合取締役被仰付、御書付御渡被遊諸郡共老組ニ而壱人式人宛被仰付候、翌年巳暮迄一人江銀式両宛被成下候、

一当四月奥野・市場両村水降、麦打落村方難儀、依之乍少分、右二ヶ村へ組合村々老俵式俵三俵ノ進上、

一同年四月四日、三宅村惣地所願ニ依而今日迄御改、跡役与兵衛殿江被仰付候、

一同年九月廿九日御奥様御安産、若殿様御誕生、御名

主税様と被為付候、御誕生恐悦之義、十月朔日男女一日休日仕候、且又御祝義ニ御領分中迄餅米百俵差上可申と申上候ヘ共、御断ニ而御受致、当村も壱俵

両村江合力ニ而市場村江届申候、

一 寛政九年二月廿六日奥野村庄屋、宇右衛門殿子息  
八郎右衛門殿江被仰付候、

一 同年殿様当春参向之御勅使御馳走御役被為蒙仰候段  
御触、右ニ付、御機嫌能御勤被為遊候様、於一宮社  
ニ二夜三日御祈禱御領分々仕候、且又御祝義ニ米千

俵差上可申と申上候へ共御断ニ而御受納無之候、扱

又御誕生御祝儀、先例之趣を以御郡中江御祝井、下  
郷江銀三枚被成下、當組江銀札七拾三匁三分五厘當  
り、当村江老匁四分老厘當候、

一 同年十一月廿三日、当村町宿魚屋治郎平殿死去、年

七十五歳ニ而候、

一 同年御触ニ是迄桐の木御用ニ而御帳付有之候へ共、

当年カ御用捨被遊趣御触、

一 同年対州或者因州又ハ伯州、其外国々沖ニ唐船と相  
見江夥敷様子と申風聞專申触候、

一 寛政十一年正月カ虛無僧修行留場ニ成、鐘鑄、

一 同年三月十六日、三木龍谷寺是迄無之處、鐘鑄、

一 同年三月十五日、下總國一月寺末山清山寺虛無僧清  
山并差添彼是五、六人為修行と順村致由、当年留場  
ニ成、初年御上ニ而も下分ニ而も心配仕候、

一 同年四月朔日カ十五日迄之間、出石如來寺善光寺如  
來開帳、

一 同年四月十五日カ宮内村庖瘡はやる、

一 同年五月廿三日御家中様式百石以上之御知行之御侍  
江今般村割被遊、御知行付御手当村御百姓と申様之  
儀被仰付候ニ付、今日大庄屋中御勘定所江被召出、

被仰付御座候、

一 同年六月、殿様大手口石橋ニ成、此石当村カユリ出

す、并近年又去冬、左右之町家御取除被仰付、大手

口広く相成申候、

一 同年七月廿九日、丹波山家谷播磨守様御入湯、出石

御昼休、右ニ付往還筋掃除并出迎等仕候、

一 同年八月十八日カ京都植川先生御出ニ而手嶋流心学

講釈あり、

一同年八月廿七日夜、雷雨氷をふらし、丹後熊野郡辺。

当国美含郡海辺、稻作穀を打落し大難之由相聞候、  
一同年九月十七日、先達而被仰付候御家中式百石以上  
之御知行村割御渡しニ付、今日御勘定所へ被召出被  
仰渡候之御事、品々有之、其御地頭所頭江庄屋百姓  
御目見被仰付候而、其御地頭所頭ガ御祝井被成下候、  
御知行付・御手当付御百姓と申訳有之、夫レ々々ニ  
御祝井被成下も高下有之候、扱又宮内・坪井・水上・  
長砂・鍛冶屋村・下村・中村・日野辺・寺坂村之九  
ヶ村者御城廓付と被仰付、御領分之一百姓と被仰付  
候而、御祝井として御米九ヶ村江三拾俵被成下、殿  
様御帰城、御発駕、御年頭之節ハ御目見被仰付候、  
右御祝井八家別割ニ而一軒ニ御米三升式勺三撮當申  
候、但、神主・寺・神子・山伏・後家・座頭・尼道  
心・御家人等之家主者頂戴相成不申候、

ニ付、御供所付と唱ヘ、御領分ニ之御百姓ニ被仰付、  
御城廓付村々之次ニ被仰付、是又御帰城、御年頭之  
節、御城廓付村同様ニ被仰付、御祝井三ヶ村江御米  
拾五俵被成下候、扱又村々庄屋向後ハ御役所向江も  
脇差帶シ罷出候様被仰付候、右段々之趣、委細之儀  
ハ御用覚帳并別帳面有之候、

一同十一月元和五年以前ガ家相続之者有之候ハ、申達  
シ候様、尤証拠ニ相成候様之書付類有之候ハ、其趣  
も申達シ候様、并宝永三年御所替以来、公事出入等  
不相顧村方有之候ハ、是又申達シ候様、且又宝永三  
年ガ代々庄屋相勤候家之者有之候ハ、申達シ候様、  
次ニ此節庄屋被仰付候ガ三十年相勤罷在候ハ、是も  
申達シ候様被仰付候、

右之通、被仰付候ハ共、此儀者何之御沙汰も無之候  
哉、何事も不承候、

鳥居村・奥小野村・美含郡余部村三ヶ村ハ今般御知  
行御村割ニ付、殿様御先祖様御供田之御闇ニ当り候

一十二月当年御家中御村渡シニ付、村方諸入用として  
御米百五拾俵被成下候、并孝人寄特人等江も御祝井

被成下、八十歳以上之老人御領分中江拾四石被成下候、極難義人(幾)以下同江ハ御米武斗宛被成下候、扱又御知行村割之村方へハ其地頭所頭タ一村一給之庄屋江ハ老斗、組頭百姓代長百姓江ハ五升宛、御知行付百姓老人江五升、御手当方御百姓老人江三升、無高之者へ壺升被成下候、合給有之村方庄屋江ハ其地頭所頭タ六升、組頭百姓代長百姓へ三升宛、知行付御手当方御百姓江三升宛被成下、無高之者へ壺升宛、右何れも御年貢継其地頭所頭様御知行之内タ被成下候、大庄屋衆へハ御上ミ下、触元江者金子武百疋、是ハ殿様タ被成下候、右之外惣御郡中江御米七百俵御祝井二被成下、家別割ニ仕候様、尤少々ハ極難之者江救ひ候共、大半残りハ貯置、凶年之用意辰年之趣ニ致候様被仰候、且又御城下火災之節、御城付村者は三御門江相詰候様、御供所付村ハ御菩提所三ヶ寺并本高寺江相詰候様被仰付候、右タ以前御領分寺社并御他領ニ而も御領分ニ一旦家有之候寺社江ハ御備へ金と

して金子百疋武百疋、或ハ山伏様之者へハ銀武兩宛被成下候、惣而被仰出之御書付數通、別紙写し置有之候、御地頭と唱へ候ハ、御知行千石以上之御家中様、御所頭と唱へ候ハ御知行武百石タ九百石迄之御家中様ヲ申候、

一寛政十一未年正月六日、去冬被成下候御米七百俵、惣御郡中江御祝井被成下、軒別割ニ致候様被仰付、當組合江拾六石六斗当り石別五拾七匁ニ而御買上願、御代銀頂戴、右之内拾五石除米ニ致、残り家別割ニ致、村々頂戴仕候、委細ハ日記帳ニ記置候、并御領中八十以上老人江御祝井去幕御米三拾五俵被成下、是又御買上奉願、老人江壺タ三分四厘宛頂戴仕候、一同年二月朔、出石宗鏡寺一道和尚御遷化、御内葬、御年八十五歳、同月六日、手嶋流心学道話、如來寺ニ而講釈有之候、江戸先生、

一同年三月十九日タ豊岡来迎寺祖師大師六百年忌并千体仏供養、廿五菩薩引接会、禿供養始る、

同月廿五日、倉見村宝勝寺開山年回并寺供養經会、

同月廿三日、一宮社江御上ノ神書八品御奉納、

同月廿六日、昌念寺住職、宵田蓮生寺入院、

一同年四月五日、於一宮社ニ二夜三日御祈禱被仰付候、  
是ハ御家中知行御村割ニ付、以来永く御祈禱致候様  
との儀ニ而、神主殿江銀拾枚被成下候、

同月十三日、御家中御知行村割被仰付候趣意、惣  
而人氣貞正孝道之心得御教諭御講釈被成下候様、諸

御郡々願候ニ付、御儒者桜井俊藏様御名代として服  
部新治郎様御留役(彼)士紀安兵衛様、右御兩人上下四

人ニ而村々御順村ニ而、老若男女庄屋元江御呼寄、  
御教諭有之、当村ハ宮内江参り承り候、

一同年六月九日、一宮社御屋祢ふき替四年ぶりニ而今  
日御成就祝義、

一同年廿六日、名主大庄屋端町庄屋御城付村庄屋御供  
所付村庄屋惣御用達、殿様御帰城御目見被仰付候、

御城付御供所付庄屋者初而之儀ニ付、御熨斗三本入

扇子献上致候、尤惣代ニ而相勤候、

同月十一日、殿様江戸御屋鋪ニ而若殿様御誕生被遊  
候と七月十一日之御触、

同七月、照統何方も難儀致候ニ付一宮社・諸杉両社  
江雨乞、五穀成就御祈禱二夜三日被仰付、滿願日ニ  
ハ一宮社江御郡奉行様御代參有之候、

同月八朔日々尾崎村善立寺ニ而伏見深草西岸寺寶物  
開帳、五日之間有之候、

同月四日日々兩鉢山村反別御見分として御奉行様方御  
出鄉、

一同年五月十三日日々當八月十六七八日雨降候迄、得斗  
地中江しまり候程之降不仕、此雨ニ而得斗志まり候、  
大根杯ハ凡三十日もはへ不申候、惣而当國ニ不限、

上方諸国共旱候由、相聞候、

一同年九月、一宮社江森尾村源藏殿日々四神矛寄付ニ而、  
御祭礼ニ初而鎌、

一当六月十一日、御誕生之若殿様御名廉三郎様と被為

付候趣、八月御触、

一 同年唐銅ニ而仏像、撞鐘、鳥居、灯籠之類作り候義、

大公儀ガ御停止御触、若右之類作り候共、木像ニ而

同様丈ヶ三尺ニ限り可申、三尺以下たりとも十体以上造立致候ハ、申達御差図を可請との被仰付ニ候、

一 同年十二月、御米拾四石当組合中ヘ被成下候、是ハ

当年旱損ニ付御心付、全く畠方江被成下候と申ニ而

ハ無之候得とも、當納大豆江割合候様、被仰付候、

一 寛政十二申年四月朔日迄五夜五日之間、於一宮社五

穀成就臨時御祈禱被仰付候、朔日朝辰巳之時九分日

蝕有之ニ付、俄ニ朔日夜始る、同三日迄二夜三日

之間、愛宕・秋葉両社ニ而火防御祈禱被仰付、御書

付等出申候、同月十五日、京都愛宕社頭坊舎焼失、

同日森尾村源太夫殿御用達御上ミニ下拝領、年々御米

六石被成下、祖父源光殿同様ニ被仰付候、

一 同七月九日十日明方豊岡中町宵田町大火焼失、

同月晦日夜、出石町御奉行上原庄右衛門様御宅江何

者とも不知、七、八人と相見ヘ忍ヒ入、庄右衛門様御夫婦、御袋殿、御家来老人以上四人切殺し、下女ハ手負、其外ニも手負有之候由、

同八月三日、当年作方虫氣強、依之虫除五穀成就御祈禱、今日迄七日七夜之間、清冷寺村東樂寺ニ而被仰付候、同廿三日、丹後久美浜御代官御替り、此度塩谷大四郎様と申御出、

当年長々雨天ニ而早稻方はえゑなからはヘ、稻木ニ懸候もはゑ、殊之外難義致候、

長々雨天ニ而諸作取入、手後難義ニ付、九月二日迄二夜三日之間、雨晴御祈禱、諸杉・田多地八幡ニ而出石山伏中江被仰付候、

同一年十一月十八日、当七月晦日夜庄右衛門様江這入、  
切殺し候惡もの、段々御詮義被遊(義以下同)候得共相知レ不申候處、誰言ふとなく其已前ハ御同役、今ニ而ハ御勘定奉行知行百五拾石之御侍猪田兎毛様之仕業と風聞、自然と顯れ、八月十五日之明方とやら自害、婦(マ)へを

かき死去被成、弥御穿鑿奥様御女子方ハ御一門へ御預ヶ、御子息鍵治郎様始御子達ハ御宅を牢ニ作入置、御類門中御番被成候由、尤意趣切とも申候へ共、兎毛様御自害後、家さかし裏山等堀りくづし御詮義被遊候処、山ニ刀隠し有之候、

## 3 散田・肥料

■申ノとし散田ノ覚（延宝八年）

池田甲子郎家文書

内四斗引	一米三石六斗	一米四斗引	一米三石六斗八升五合	内三石四斗	内三石四斗
同五升	さかへ	同武斗引	武拾壱石六斗ノ預ヶ口	内三斗ハ普請ノてま替	内三斗ハ普請ノてま替
一米七斗	なわしろ	一米七石一斗	壱石九斗八升五合引	残武拾壱石三斗預ヶ口	残武拾壱石三斗預ヶ口
たから	田	同六斗引	水上		
一米七石一斗	一米七石一斗	同六斗引	惣右衛門		
一米壱石一斗	一米壱石一斗	同六斗引			
一米壱石三斗五升	一米壱石三斗五升	同六斗引			
同五斗三升五合	同三升五合	同三升五合			
同三升五合	同三升五合	同三升五合			

一米三石六斗	一米四斗引	一米三石六斗八升五合	内三石四斗	内三石四斗
さかへ	同武斗引	武拾壱石六斗ノ預ヶ口	内三斗ハ普請ノてま替	内三斗ハ普請ノてま替
なわしろ	一米七斗	壱石九斗八升五合引	残武拾壱石三斗預ヶ口	残武拾壱石三斗預ヶ口
田	たから	水上		
一米七石一斗	一米七石一斗	惣右衛門		
同六斗引	同六斗引			
二口メ三石八斗五升内武斗引	二口メ三石八斗五升内武斗引			
残三石六斗五升	残三石六斗五升			
七間町	七間町			
同四石三斗	同四石三斗			
弥兵衛	弥兵衛			
内五升まけ	内五升まけ			
長砂	長砂			
九右衛門	九右衛門			

五 村の生活

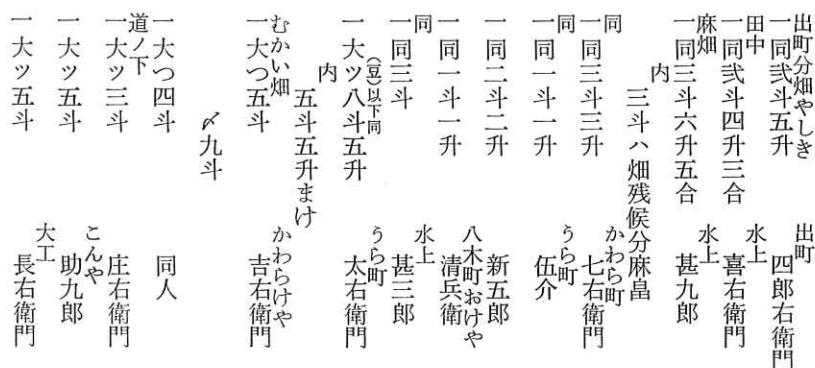
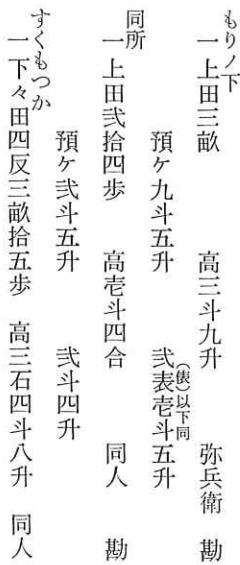


図5 口小野村高書之覚預ケ口共（元禄十五年）

西村平八郎家文書



はしりなわて 一上田壱反弐拾四歩 桃塚孫次郎分 下々田四反三畝拾五歩 取米武石八斗四升六合	預ヶ四石六斗五升 上田壱反弐拾四歩 高壱石四斗四合 高壱石五升 捨壱表壱斗	中島助太夫分 上田九畝弐拾壱歩 高壱石弐斗六升壱合 高壱石三升八合 中奥山
くこ田 一下田壱畝 一中田壱畝 一中田壱七畝 一中田七畝	預ヶ弐石壱斗 高壱斗壱升 高七斗七升 高八斗四升 預ヶ壱石弐斗	五表三升 同人 九升七合 同人 同人 同人 同人 同人 同人
ちそうノ本 はしりなわて 一中田六畝拾弐歩 はしつめ 一中田七畝	預ヶ壱石 武表壱斗七升 高壱斗六升八合 高壱斗五升 武表三斗六升 武表三斗六升	武表壱斗七升 高九斗壱升 弥兵衛 三表武斗五升 同人 (以下略)
一上々田六畝拾五歩 五段田孫助分 上々田六畝三歩 此預米壱石弐斗五升 高八斗五升四合	一上々田六畝三歩 取米七斗四合 取米七斗四合 高八斗五升四合	同所同人分 此預米壱石弐斗五升 高九斗壱升 手前作 手前作 手前作
一上田七畝弐拾壱歩 取米八斗弐升四合 此預米壱石三斗五升 東繩手	西村平八郎家文書 ○勘は照合済の印らしい。	高壱石壱合 本口夫共 徳三郎右衛門 作 本口夫共

圖文 散田覺帳（文政年間）

西村平八郎家文書

清水田<sub>与平分</sub>  
一上田七畝弐拾壱歩  
高壱石壱合

取米八斗弐升四合  
本口夫共  
此預米壱石三斗五升

桃塚孫次郎分  
下々田四反三畝拾五歩  
高壱石四斗八升  
本口夫共

若宮与平分  
一上田壱畝 六畝九歩之内  
六畝四合  
取米壱斗九升武合  
高武斗三升四合  
本口夫共  
此預米四斗  
家ノ下利兵衛作

宮ノ下与平分

上々田武畝  
高武斗八升

取米武斗壱升

本口夫共

此預米四斗

下ノ出口 手圖

(以下略)

一上田壱石三斗盛

此年貢壱石六升六合

八ツ武分

壱斗武合

夫口米

壱斗三升

諸役入用

メ壱石三斗八合

残而五斗程

地主取

預ヶ口壱反ニ付、壱石三斗六四斗迄

一中田壱石武斗盛

此年貢九斗八升四合

八ツ武分

壱斗八合武勺四撮

夫口米

壱斗三升

諸役入用

一田地預口之儀大方左之通ニ候、然共郡々ニ而少々ツ  
、の違有之候得共、さして大成替り茂無御座候、上  
田・中田・下田ニ而預ヶ口違候様ニ候得共左ニあら  
す、古來之上田・中田・下田水帳ニ相違茂無之候へ  
共、地面惡敷罷成、又ハ木下などに成、其節之下田

留セ 在方田方預ヶ口之品

『但州叢書』山之井 十

出石神社藏

メ壱石三斗八合

夫口米

壱斗三升

諸役入用

預ヶ口壱反ニ付、壱石三斗六四斗迄

一中田壱石武斗盛

八ツ武分

壱斗八合武勺四撮

夫口米

壱斗三升

諸役入用

者惡敷、其節之下田日當り茂能、土も直り、唯今之  
上田々増ニ成候茂有之候ニ付、在方ニ而ハ上場・中  
場・下場とて其場所々ニ而預ヶ口極メ申候、尤小作  
之者茂其段能存候故、其通りニ預り申候、土台ヲ如  
斯ニ呑込候而諸事考可申候、

預ヶ口壱反ニ付、壱石六斗六七斗迄

メ 壱石弐斗弐升弐合余

残而壹斗七升八合 地主取

預ヶ口壹反ニ付、壹石壹斗弐升弐斗迄

一下田壹石壹斗盛

此年貢九斗弐合 八ツ弐分

九升九合 夫口米

壹斗三升 諸役入用

壹石壹斗三升壹合

地主取

一郡々ニ有壹反之田三百坪ニ候得共弐百四拾坪ヲ壹反

トメ預ヶ申茂有之候、左候ヘハ六拾坪之分小作ニ預

ケ候而茂又ハ手前ニ而作り候而も、其分右之外ニ地

主取ニ罷成候、

一壱反切ニ預ヶ申候ニ此田広く壹反弐畝も御座候様成

ハ、壹反之田ヲ預ヶ口弐石ニも預ヶ申ニ付、地主取

多罷成候、

一右之通之預ヶ口ニ候ヘハ曲尺相下り御座候所ハ地主

大分成取多御座候様可存候ヘ共、左ニあらす、曲尺相下り御座候處者預ヶ口上田者高曲尺之中田之預ヶ口、中田ハ下田之預ヶ口罷成候故、地主之取ハ高曲尺

之田之通ニ成申候、常曲尺相下り候故也、か様成田ハ氣ヲ付、見可申候、居り茂惡敷、其上地面浅く候故出来不宜候、然共左様成田ニ茂地面茂能候ヘハ預

ヶ口高曲尺之田之通ニ預ヶ申ニ寄、地主多御座候茂常々曲尺下り御座候所者、檢見之節少シ御取強く御座候而も間も相申候とも、七ツを越可申曲尺相之場所ハ取強く候ヘ者村方難儀弱り申物御座候、此心得

第一ニ御座候、

一檢見并常々其村ニ而預ヶ口等之儀承候ヘハ、次第二村方之甲乙も存、物事考ニ成申候間、昼夜隙々ニ者此心掛ケ専ニ御座候、

#### 四六 請切支配手形之事

平尾源太夫家文書

一分高合拾九石七斗八合

一此預米合式拾九石四斗六升

内

拾六石老斗一升五合

御物成引

免支配料并ニ

不時入用心當引

徳米平均銀■御定

残テ拾石

右之田地、此度当午年々來ル子年迄七ヶ年之間、請切  
支配達テ御願申上候処、御得心被成下、忝奉存候、然  
ル上者御定之通り年々十二月廿日限り利米ニ付銀「」  
宛相立可申候、万々一老ヶ年ニ而も遲滯仕候得者支配  
御取揚被成、如何様共御心懸之御支配可被成候、其節  
ニ至一言之故障申出申間敷儀ハ申ニ不及、尤此田地ニ  
付、新法之義遣出仕候共、私共引請聊御無心申間敷儀  
為後日之田地請切支配手形、仍而如件、

安政五年午十月

請切支配人口小野村

助太郎

平尾源太夫殿  
世話人  
平尾字次郎殿

四九 気多郡拾九ヶ村田畠肥し之事

『但州叢書』山の井三 出石神社蔵

一つのし拾七万六百本程無之候へハ、こやし不残不罷  
成候由、御代官永井忠兵衛詮儀遂ケ申達候事、然者  
浜方得心不仕、依之正徳四年午片岡錠助美含郡一日  
市村・若松村・坂口村之者共、氣多郡納屋願之者共  
ト得ト入割申聞、双方一札ヲ取替させ、御代官ヘ左  
之通一札差上候様、申談候而事済之事

奉差上一札之事

一美含郡一日市村・若松村・坂口村并両郡納屋漁船諸  
魚不残勘定之義、水上ヶ之通、舟頭中より納屋買取  
可申候事

一つのしわけ口五分五分之定、尤坪わけ闇取ニシモ老番  
替り相定候事

一神闘漁舟壠艘ニ付、五百本ツ、取候時者、式拾本ツ

、浜方へ取可申候、五百本の魚數減し候時者魚數ニ

相応し取可申候事

一つのし百本ニ付、美魚拾本ツ、同百本ニ付わけ魚

九本ツ、但し、並魚ニ而浜方へ取可申候事

一十坪之内五坪浜方へ請取、田畑こやしニ仕候事

一步錢つのし百本ニ付、式分方直段(直)之方ニ浜方へ請取

可申候事

一諸魚之儀、不殘納屋へ其時々之相場ヲ以壳渡可申候、

勿論他領へ一切壳申間舗候、然共両方差支之儀有之

候ハ、浜方納方申談候上ニ而、他所壳致可申候事、

右之通、此度双方立会相定候通、少しも相違無御座候、  
自然相背候ハ、何分ニ茂可被仰付候、為後日一札如件、

置○ 気多郡拾九ヶ村伏村納屋願之事  
但州叢書 山の井 三 出石神社蔵  
 一正徳二年辰之春、氣多郡之者共伏村ニ納屋立申度旨  
 願申達候村々

一日市村庄屋七郎右衛門	松岡村	土居村	新村	府市場	堀村	七左衛門
若松村庄屋 五右衛門	野々庄村	池上村	芝村	上石村	竹貫村	
坂井村庄屋 平三郎	上郷村	中ノ郷村	引野村	土淵村	佐野村	土淵村
上石村庄屋 弥左衛門	加陽村	清冷寺村	八社宮村	伏村		久兵衛

正徳四年  
午十一月十六日

堀村

七左衛門  
久兵衛

佐野村

茂七郎

堀村

二郎太夫  
治太夫

大庄屋上郷村  
大庄屋坊岡村

弥吉

中西佐右衛門様

永井忠兵衛様

右拾九ヶ村

高六千百五拾七石五斗四升九合

置一 氣多郡佐野村之納屋株之覧

『但州叢書』 山の井 三 出石神社藏

一一木屋	上石村 弥兵衛
一中屋	（佐野）野々庄村 茂七郎
一柴屋	（竹野）野浜 八郎左衛門
一九鹿屋	喜右衛門
一堀屋	土淵村 久兵衛
一弥布屋	（堀）岩中村 孫右衛門 孫右衛門 八郎兵衛
	太左衛門
	孫右衛門

4 懇訴・一揆・村定め

享保十四年酉九月

同村長百姓  
六兵衛

下郷片間村百姓代  
伝次郎

置二 下郷片間村拾ヶ年請免之事

『但州叢書』 山の井 十五 出石神社藏

乍懃奉願上候口上之覧、

一 当村之儀、常々弱村、其上打統惡作仕御百姓共困窮  
仕候處、御願ヲ以唯今迄取統罷在難有仕合奉存候、  
近頃恐多御願ニ奉存候得共先達而奉願候通、今年立  
午之年迄十年之内、田方夫口米共ニ八拾八石四斗ツ  
、御請切御定免ニ御慈悲ニ被仰付被下候ハヽ、難有  
奉存候、尤右之外本畑三ツ三歩、新田畑毫ツ五步、  
麻屋敷等之儀、唯今迄之通、米大豆御上納可仕候、  
右御定拾年之內、旱損水損何様之大變御座候共、御  
請合之通少茂相違不仕、御上納可仕候、若村方不納  
仕候者、請合之者共急度御上納可仕候、此上何分ニ  
も御慈悲之御了簡被為成下候様偏ニ奉願上候、以上

右之通申達候ニ付、御詮儀有之候処、三木村茂同事  
 願申達候ニ付、尚以吟味仕候処、小出様御代ニモ片  
 間村御定免被仰付候、三木村不被仰付候、依之右之  
 品大庄屋九郎右衛門一札差出候、

同村組頭	長右衛門
同村庄屋	七郎兵衛
御請合人 宵田村	利左衛門
土居村庄屋	九左衛門
堀村庄屋	喜兵衛
清冷寺村庄屋	源次郎
荒木村莊屋	六郎左衛門
鶴村莊屋	忠右衛門
伊豆村莊屋	源左衛門
伊豆村大庄屋	九郎右衛門
乍恐口上之覚	
一下鄉片間村々拾年内御定免御請切奉願上候処ニ、 <small>(事乞)</small> 三木村より同年之御願仕候様ニ及御聞被遊候ニ付、 古來之様子御尋被遊候処ニ片間村之儀者小出様御代 ニ御請切之証拠所持仕、慥ニ御座候、三木村儀者何 之古來之証拠一切無御座候ニ付、下乞御願仕候而も 乍恐私儀者御取次之儀得仕間敷候様ニ奉存候、三木 村左様ニ御座候得者水所之村々者不残及御願申候様 ニ奉存候、以上	
伊豆村大庄屋	九郎右衛門
享保十四年酉九月	
伊豆村大庄屋	九郎右衛門
工藤平太夫様	
小林友右衛門様	
工藤平太夫様	
小林友右衛門様	

出石郡片間村田方御請仕覚

進上御勘定所

一 田方御物成百三石六斗九升四合御土免ニ被仰付、

年々御納所仕来り候ヘ共、水所ニ而御座候得者度

々御檢見御請申上候儀、迷惑仕ニ付、御訴訟申上

候處、右百三石六斗九升四合此分當子年々十年御

用捨被遊候、然共不納之年ハ此式拾三石六斗余ヲ

右八拾石之内江算用ニ立入、不足仕候者自分より

足可申候、如何程水損出来申候共、右八拾石者御

請仕、十年之間、無相違上納可仕候、若又水損無

御座候共右余米自分集置足ニ可仕候、少茂私用ニ

引取申間敷候、則右請合土居村庄屋九右衛門請人

ニ相立申候、十ヶ年過戊年々ハ御見付之御免相ニ

被仰付候筈、御請申上候、本畑之儀者御土免之通、

物成三石九斗六升壹合上納可仕候、新田畑之儀ハ

老ツ五分ツ、御請仕候、為後日如件、

貞享元年子七月

出石郡片間村

大庄屋

六郎右衛門

五郎左衛門

御請仕候、為後日御請切証文如件、

表書之通、御仕置所各相談之上、究遣候者也、

同日

遠山吉左衛門  
羽間瀬兵衛

右之品故片間村願之通り被仰付、証文取置申候、  
出石郡片間村田方御請仕候覺

一 当村之儀、至極水所ニ而御座候故、年々御檢見御請

申上候儀、迷惑奉存候、其上近年打続惡作仕候而困

窮仕候ニ付、此度御願申上候處、当西年々午年迄十

年之内、田方御物成夫米口米共八拾八石四斗究ニ御

請切御免被為成下、難有仕合ニ奉存候、然ル上者縱

水損旱損其外何様之大變御座候とも、右御請申上候

十年之内少茂無滯、毎年右之御請米急度御上納可仕

候、右之為御請相類之者共御証文差上置申候、十年

過未之年々ハ如何様ニも可被仰付、右之外本畑三ツ

三歩、新田畑老ツ五分、麻屋敷等之儀ハ唯今迄之通、

片間村百姓代

伝次郎

同村長百姓

六兵衛

享保十四年

酉

九月

長右衛門

同村組頭

大庄屋

七郎兵衛

九郎右衛門

大庄屋

七郎兵衛

九郎右衛門

候へ者、田地其身之物ニ罷成候故、田地放申御百姓  
多く無御座候、  
一伊賀守様御代、御取込茂年々上り、其上年皆済被仰  
付候故、段々村々よハリ申候、

工藤平太夫様  
小林友右衛門様四  
御郡中困窮之品御用部屋へ差出候書付

『但州叢書』山之井十四 出石神社蔵

御郡々近年困窮仕候義(儀)以下同得斗考申候所、近年之悪  
作斗ニ而無御座、數年之儀ニ被存候、其品ハ

一小出様御代ニ者御取込茂嚴敷、度々検地等も被仰付  
候へ共在方差而困窮も相聞不申候品ハ、御年貢其年  
皆済成不申候ハ未進罷成、翌年越御取立、大分ニ未  
進御座候者子供共兄弟ノ内ヲ御中間被召抱、三石ニ  
武人扶持ツ、被成下、右三石ツ、ニ而未進を皆済仕

納弥藏請合皆済分ニ罷成申候、依之御百姓共春夏ヘ  
向糸綿ニ而未進上納難成候ヘハ、田畠壳払候ヘハ直(直)以下同  
段も程々ニ壳申候而上納仕来候、其内山之中別而困  
窮と申候ハ、御役所ガ御延米并町会所請込迄夏中ニ  
嚴敷御取立、其上暮ニも御延米茂不被仰付未進も嚴

敷御取立故、別而困窮仕候、然ル所ニ又候、近年森甚  
 左衛門一身ニ引請、手代差下置申故、町会所請込と  
 申儀、多キ分ニ而一郡ニ武拾石三十石程ならてハ請  
 辻不申、口夫共ニ正二月切ニ取立申故、暮ニ田畠壳  
 払申ニ付、捨壳同様之直段ニ御座候間、御郡ニ而田  
〔享保十七年〕子之年大虫  
 地高持申候御百姓共近年多く漬レ申候、  
 付ニ而大分之不納之処、翌年不残取立上納仕ニ付、  
 御百姓皆済仕候様ニ相見ヘ候ヘ共、内証之差引ハ一  
 切埒明不申、出入等ニ罷成、又ハ欠落仕候御百姓茂  
 御座候而田地家屋舗割符ニ罷成候而借し方大分之損  
 銀仕候者多く御座候故、借方之者無御座、御百姓水  
 吞之類茂別而難儀仕候、其上二、三年打続悪作故、  
 当然之渡世ニ難儀仕、作方も乍存知、不手入ニ罷成  
 候と奉存候、右之趣ニ而年々御百姓共因窮仕候、  
 上之被遊方、御非道無御座ト下ニ而茂申候得共、在  
 方段々弱り申村々多く罷成、末ニ至而ハ御救等茂中  
 ャ參届申間敷ト被存候、然共私共ニ御郡々ヲ支配被

仰付置候ヘハ御大切至極奉存、昼夜無油断心懸候ヘ  
 共、元來地方不案内、其上愚意之私儀ニ候ヘハ行當  
 り罷在候處、地方能存候者他所ニ御座候間、近付ニ  
 罷成候而右之者ニ承候趣、左ニ記申候、

一 武兵衛間申候趣ハ右之通村々段々弱り申ニ者如何様  
 成致方ニ而村方茂段々能く罷成可申候哉、

答、成程村方よハリ申儀ハ惡作一両年統候とて茂  
 つぶれ申物ニ而も無御座候得共、數年少しつゝ之  
 儀積り、連々よわり申物ニ御座候間、存知寄申上  
 候、右之様成村々ニ候ハ、御檢見之時分、御心入  
 可有御座義ト奉存候、其訛は御檢見ニ御出被成候  
 御方様御一人ニ人夫拾人ツ、入申候、是斗ニ而事  
 濟候儀と思召候事、御不案内ニ御座候、御檢見御  
 出前夕宿々之掃除匂等仕候人夫、凡御一人前ニ三  
 十人斗も入可申候、御百姓第一鬧敷時分、右之人  
 夫遣申儀難儀至極ニ御座候、右之人夫ヲ以、麦作  
 等を仕付、稻も早く刈取候ヘハ、村方ニ而薪壳又

ハ筵・草履・わらじ之様成物作り、渡世ニ罷成候間、ケ様成儀御考御算用ヲ御入可被仰付候、第一檢見御入用いか様ニ仕候而も覺御座候、御家様ニ而ハ外々御慈悲ニ而料理茂一汁一菜、御酒杯も一切出不申候、外様ニ而隨分軽きと申候而も一汁三菜々軽きハ無御座、是ニ而も各様御賄御入用上々御扶持方被成下候得ハ、内証之入用余程之義御座候、此儀ハ委細ニ者不被申上候、ケ様成事御座候ハ御檢見願申候ハ能々と可被思召候、御家之御檢見被遊方、近年外様之小檢見ト申程ニ御座候、御引方帳成ニ被下候而も檢見入用ハ下々損に罷成候、此處得ト御考可被成候、

一 武兵衛問、左候ハハ檢見不致、何年之取込ヲ平均ニ致し請免ニ申付候が能候哉、

成程左様ニ候得共諸免平均ニ而被仰付候ハ一郡ニ一ヶ村二ヶ村勝レ而困窮之村ハ格別、其外之村々一統ニ平均ニ而請免ハ御損ニ御座候、定曲尺相合

ハ御取込下り申ものニ而御座候、縛ハ何年之平均ニ而何年之内請免ト被仰付候而も、子之年之様成大變之節、御定之通御取上被成候義、成悪く可有御座候、尤下々御願可申上候御取上ヶ無之事済候而も上納仕物無御座候ニ付不納多く罷成、其上飢人多可有御座候、毎方申上候者爰ニ而御座候、其品は近年御家ニ而下見分ニ手代下目付在々ハ御廻し被成候儀、御尤至極ニ御座候、然れ共見分一通りニ而御徳用相見ハ不申候、此已後ハ大庄屋ヲハ加ヘ大庄屋ニ誓詞被仰付、右之衆中と一所ニ御廻し被遊候而毛損之様子大庄屋吟味仕候而書付御取被成候而、毛損在々ダ七歩ト申達候ハ、右入用御算用被遊候而五分か五分五厘之下相対免被仰付、其上大庄屋々村々庄屋長百姓迄得と申聞、得心ニ候ハ、其年切之請免ニ可被仰付候、左候ハハ御取込茂上り、下々茂能可有御座候、其品は人夫并御檢見物入等差引候ハ毛損式分や三分哉多被下候

右ハ仕能御座候、上ニ茂右之分御徳用ニ罷成候、

第一ニ奉存候、

右之通被遊候ハ、御取込ハ上り可申ト奉存候、其内作方能御座候年ハ定之御曲尺相ニ而同檢見なしニ上納可仕候、万ニ右之通ニ而ハ迷惑仕候由申達

一 武兵衛間、村方ニ右田地之内勝テ惡田有之候ヘとも、定曲尺相ニ而年貢上納仕候、か様成類ハ如何致能候哉、

候ハ、御檢見ニ御出被成、舛付被成候と相知申儀ニ御座候間、何ヶ年之平均何年内請免と被仰付候儀御見合、右之通り一ヶ年御損と思召、被仰付御覽可被成候、其内ニ茂、定曲尺相ニ而何年請免と申候ハ、隨分可被仰付候、左様成御郡者養父郡ハ格別、外之御郡ニは有御座間敷候、御檢見願申者ハとの郡ニ而茂一ヶ村ニ人なら三、四人よりハ無御座者ニ而御座候、御百姓中上ヲは隨分恐申ニ付、無調法成申立ハ不仕候得共、村方ニ壱人か武人悪舗者御座候、其者とやかくとすゝめ申故、大勢ニ罷成候間、左様成者ヲ常々御聞合御吟味被遊、御咎メ被仰付候ハ、無之者ニ而御座候、村之内ヘ悪人御座候と村柄共ニ悪敷罷成候間、此段御心掛

答、此類ハ何方ニも多御座候、御檢地之時分能田と惡敷田所持仕候御百姓共ニ御座候故、平均ニ致し曲尺相ヲ付申候、然ル處に段々百姓不勝手ニ罷成候而田地壳申候節、惡田ヲハ調不申ニ付、能き田斗壳候而、惡田斗所持仕候而年貢上納可仕様無之、上地又ハ御百姓欠落仕候ヘハ村中ヘ御預ケ惣作ニ罷成候間、右之御年貢ニ難儀仕により外作方ハ称々ニ而茂御檢見願申候、ケ様成田地ヘ高百石之内ニ武拾石ニは無之物ニ而御座候間、ケ様成ハ得ト御吟味被成候而何ヶ年と年切り被成、曲尺相御下ヶ被成候ヘハ御百姓取統申候、此類ハ外々ニ茂何程も免下ヶ逆御座候、免下と被仰付候ヘハ永々免下ヶニ罷成候間、永々免下ヶニ成候とも先ハ

年切り被成候而被仰付候か能御座候、

右之書付、享保廿卯年、伴十右衛門御用ニ而江戸ヘ罷越候節、正月二日十右衛門宅へ寄合之刻同役共申聞候ハ、御用部屋ニ而茂在々ヲ引候而御所務方年々下り候様ニ第一森庄左衛門申候由ニ而、在方御救之儀申達候

而も、堺明不申、氣之毒ニ存候由申聞候ニ付、武兵衛申候、左様ニ而ハ各々茂難被申達由尤候、庄左衛門願申候ハ当年乃檢見ニ御年寄申御出不足之處ハ御用人中被出候様致度之由、方々以御為ニツ茂成候儀無御座候、幸私儀旧冬乃病氣ニ而罷在候間、青木一学迄私存寄ニ而申達様可有之候と申談、右之書付認、一学方迄内証申達趣ハ、私儀真龍院様ニ殿様迄段々御取立之儀難有奉存候、然其愚知其上地方之儀不案内候間、方々聞合候書付御座候、御一覽被下、万一可然共思召候ハ、御年寄中江茂御相談可被下候と申、其上庄左衛門存寄ニ而各様御用人中檢見ニ御出被成候儀、御為ニ成可申とも不被存候由申達候而右之書付差出候処、一学

得と一覽之上ニ而御年寄申ヘ順達有之、杉原民部方より尤至極成書付ニ候、御郡方ハ各三人ニ御願之事ニ候得は、不限之無遠慮内証可申達候、如何様共相談可致由申、右之書付戾り申候、

#### 四 檢見回数削減の願書

辨済区有文書

乍恐奉願上口上之覚

一御檢見之義(儀以下同)早稻・晚稻兩度御見分兼而被為仰付置、

右ニ付去子年乃兩度奉願上候処、乍恐兩度之御見分奉願上候而者早稻刈入等茂自然と延引仕、万端ニ付難渋仕候ニ付、何卒以御慈悲ヲ當丑年乃来ル午年まで六ヶ年之内、晚稻方一方之御檢見被為仰付被成下候様、偏ニ奉願上候、尤早稻方之義ハ、不作仕候共皆無之義ハ格別御檢見之義、御願申上間敷候ニ付、何卒晚稻方斗リ御檢見奉願上候、右願之通被為仰付被為成下候ハ、村々一統難有仕合ニ奉存上候、以上

五 村の生活

文化二年七月  
丑ノ月

三宅村庄屋

宗四郎

一現米拾壱石八斗八升三合

合毛田

無脇

上鉢山村庄屋

与兵衛

一同 壱石九斗五升

無田

袴狹村庄屋

善太夫

一同 弐石九斗壹升弐合

無田

大谷村庄屋

小兵衛

一現米百拾弐石九斗壹升七合

袴狹村

伊豆村庄屋

彦右衛門

一同 拾五石八斗三升三合

合毛田

片間村庄屋

六兵衛

一同 拾五石八斗三升三合

無脇

右願之通、為仰付被成下候様、奉願上候、以上

無田

大庄屋宮内村 市郎左衛門

一現米三拾弐石五斗

口小野村

鳥居村 新兵衛

一同 九石九斗五合

合毛田

同

一同 拾石八升四合

無脇

天保七年年貢上納請書

袴狹区有文書

一現米三拾伍石弐石五斗

無田

奉差上御請書之事

一同 拾石九斗五合

奥小野村

宮内村 合毛田

一同 拾石九斗五合

合毛田

一現米百六石壹斗九升六合

一同 拾石九斗五合

無脇

一同 五石六斗五合

一同 拾石九斗五合

無田

一同 拾壱石九斗九升五合

一同 拾石九斗五合

無田

坪井村

一現米拾八石壹斗弐升七合

田多地村 合毛田

4 憇訴・一揆・村定め

一同	七石武斗七升四合					無 脇	立石村
一同	式拾八石壱斗五升三合					無 田	合毛田
一現	米拾三石五升七合					無 脇	森尾村
一同	七石式斗九升					無 脇	合毛田
一同	四拾三石五斗四升七合					無 田	立石村
一現	米五拾四石武斗八升壱合					無 脇	無 田
一同	三拾八石三斗三升四合					無 脇	市場村
一同	六拾九石七斗七升武合					無 田	合毛田
上鉢山村	合毛田	無 脇	無 田	無 田	無 田	無 脇	立石村
下鉢山村	合毛田	無 脇	無 田	無 田	無 田	無 脇	市場村
一現	米三拾石壱升四合						
一同	拾壱石八斗六升五合						
一同	拾石三斗武升七合						
香住村	合毛田	無 脇	無 田	無 田	無 田	無 脇	立石村
合毛田	無 脇	無 田	無 田	無 田	無 田	無 脇	市場村
一現	米式拾壱石三斗壱升武合						
一同	三拾武石三斗四升九合						
無 脇	無 田	無 田	無 田	無 田	無 田	無 脇	立石村
無 脇	無 田	無 田	無 田	無 田	無 田	無 脇	市場村
一現	米式拾壱石三斗壱升武合						
一同	三拾武石三斗四升九合						
無 脇	無 田	無 田	無 田	無 田	無 田	無 脇	立石村
無 田	無 田	無 田	無 田	無 田	無 田	無 脇	市場村
一現	米式拾石武斗五升八合						
一同	三石九斗六升五合						
一同	五石五斗四升三合						
無 田	無 田	無 田	無 田	無 田	無 田	無 脇	立石村
無 田	無 田	無 田	無 田	無 田	無 田	無 脇	市場村

メ

奥野村

小林縲蔵様

川見すゞ志家文書

一現米三拾九石武斗三升五合

一同 拾八石八斗武升七合

一同 三拾四石壹斗九升九合

無田

たとえハ免六ツ六歩  
定穀八合八勺

メ

合千武百武拾三石三斗武升武合

たとへハ願  
反別四町壹畝九步

無田

右者当晚稻方御検見奉願上候処、以御慈悲ヲ御相対免  
被為仰付、一同難有仕合ニ奉存上候、然ル上者御定メ

同願

高四拾九石五斗武升武合

同願

反別三町壹反九畝

無田

以上  
天保七年

(十五村庄屋組頭百姓代

申十月 連印略

高三拾九石六斗武升四合

メ反別七町武反九步

高八拾九石壹斗四升六合

右見分平均七歩方引 メ

高五拾九石四斗武合

此現石四拾三石三斗武升壹合

大庄屋宮内村  
神床市郎右衛門(印)

稲垣源五左衛門様

竹村源左衛門様

右三歩方見出シニメ

高武拾九石七斗四升四合

此現石武拾壱石六斗九升武合

植付毛分早稻方

反別九<sub>(町)</sub>三反七畝廿壱歩

高百拾七石七斗六升武合

内 無田無脇願事引

残反別武町壱反七畝拾武步

高武拾八石六斗壱升六合

右見平均ニ而壱升武合 江見込

三合武勺見出ニメ

此初武拾石八斗七升武合

此現石六石九斗壱升九合

見出武 四合

現石武拾八石六斗壱升壱合

引方

現石四拾三石三斗武升壱合

差引

現石拾四石七斗壱升

全引方

右之通、被仰出候ニ付、向後無違失相心得可申事

嘉永六

丑九月

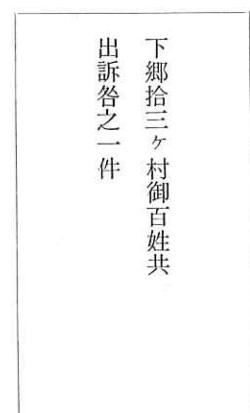
里七 下郷拾三ヶ村御百姓共出訴咎之一件

西村平八郎家文書

(表紙)

下郷拾三ヶ村御百姓共

出訴咎之一件



大谷村庄屋

小兵衛

右之者於宅ニ十月十四日此度下郷之内拾武ヶ村之者  
共願筋之義申合、(儀)以下同、其席江相集り候人別十人之内七人

申固メ、十五日之朝水上村川原迄村々押出シ、可相願段相決候処、十四日夜ニ入相破レ其後未分ゞ申固メ十月十九日廿日鳥居村川原江右拾武ヶ村之者、尤大勢罷出相集候一件、元來此者頭取既ニ村々庄屋共百姓共江申散し候儀、并十四日小兵衛宅会合席ゐ

小野組五ヶ村江茂右大勢申合、出訴之趣、三木村伊

右衛門と申者ヲ以而申遣、小野組迄申談候義、段々詮義(議以下同)之上、及白狀ニ全此度之一件、頭取り相決し牢

舎申付候事

一  
福居村百姓  
七郎右衛門  
宅江伊豆村儀右衛門誘引致し罷越、其席江隣村庄屋共相集、鳥居村川原江村々押出シ為願可申段、小兵衛と重々申合、外村々庄屋共も及同心ニ候義、詮義之上、及白狀ニ、右兩人全頭取ニ相決、牢舎申付候事

福居村百姓

七郎右衛門

福居村庄屋甚四郎  
右此者義、十月初嶋村於道場、檢見之村々庄屋とも相集候節、表向者刈入之相談と申なし、内分ハ当年柄之義、檢見之節請状証文等庄屋・組頭・小百姓ニ至迄連印ヲ以差出し、上納皆済之義ハ相決候義、今更申分無之願筋茂申立無之ニ付、一統ニ逐電可仕發言申合候得共不相固、其後十月十四日大谷村小兵衛

申固、連印等致シ、同十六日田立村庄屋市三郎宅江罷越、其席江安良庄村庄屋弥右衛門・上鉢山村庄屋伴十右衛門致参会、願之義相企、同日福居村田和江村々ダ老兩人ツ、罷出、十九日二十日押出シ候申固、老人々ツ、出るもの共皆無田之稻并無实入大豆から持出、相印、人々草鞋之跡之乳をばづし、其外相言葉を定、右稻大豆からを積、其上ニ願書を竹ニ差置べく段申

談候旨、一々詮義之上、及白状、全頭取ニ相極、牢  
舎申付候事

三木村庄屋 岡次右衛門

日福居村田和江居村之百姓差遣ノ申談為致候義、小  
野組五ヶ村之頭取申固候段、詮義之上及白状、首鎖  
申付候事

安良村庄屋 弥右衛門

右此者義、十月十四日大谷村小兵衛宅江罷出、村々  
押し出シ可願段申談シ居村之者共江申舍、大概右同  
罪ニ候得共、十九日押出候時節、其刻も内分取納  
度意茂有之候得とも、申達シ等ハ不仕、此度段々及  
詮義、最初々不相陣白状致<sup>(陳)</sup>筋合相分り候ニ付、首

忠右衛門

右同断ニ付、首鎖申付候、併此もの義ハ詮義之節、  
兩日再吟味之節、委細及白状、是々詮義筋も相分り、  
少し罪憚り御座候事

鎖申付候事

伊豆村庄屋 儀右衛門  
上鉢山村庄屋六左衛門せかれ  
十右衛門

右此者義、十月十四日安良村善光寺江小野組五ヶ村  
庄屋共相集、当年柄ニ付、何卒願方も可有之哉、及  
相談ニ候處、大谷村小兵衛宅も三木村百姓伊右衛門

鳴村百姓

右此者義、十月十四日安良村善光寺江小野組五ヶ村  
庄屋共相集、当年柄ニ付、何卒願方も可有之哉、及  
相談ニ候處、大谷村小兵衛宅も三木村百姓伊右衛門  
を以押出シ可相願段勧遣シ、右及相談ニ候處十六日

福居村七郎右衛門・田立村市三郎宅ニ而掛ケ合、同

田立村庄屋 市三郎

嶋村庄屋 幸八 香住庄村屋 平三郎 片間庄村屋 六兵衛 丸谷庄村屋 四郎太夫 福居村百姓 直七 嶋村百姓 五郎兵衛 伊豆村百姓 善太夫 片間村百姓 弥七 三木村百姓 伊右衛門 丸谷村百姓 利兵衛 下鉢山村百姓 七右衛門 大谷村百姓 十兵衛	嶋村庄屋 幸八 香住庄村屋 平三郎 片間庄村屋 六兵衛 丸谷庄村屋 四郎太夫 福居村百姓 直七 嶋村百姓 五郎兵衛 伊豆村百姓 善太夫 片間村百姓 弥七 三木村百姓 伊右衛門 丸谷村百姓 利兵衛 下鉢山村百姓 七右衛門 大谷村百姓 十兵衛	嶋村庄屋 幸八 香住庄村屋 平三郎 片間庄村屋 六兵衛 丸谷庄村屋 四郎太夫 福居村百姓 直七 嶋村百姓 五郎兵衛 伊豆村百姓 善太夫 片間村百姓 弥七 三木村百姓 伊右衛門 丸谷村百姓 利兵衛 下鉢山村百姓 七右衛門 大谷村百姓 十兵衛	嶋村庄屋 幸八 香住庄村屋 平三郎 片間庄村屋 六兵衛 丸谷庄村屋 四郎太夫 福居村百姓 直七 嶋村百姓 五郎兵衛 伊豆村百姓 善太夫 片間村百姓 弥七 三木村百姓 伊右衛門 丸谷村百姓 利兵衛 下鉢山村百姓 七右衛門 大谷村百姓 十兵衛	嶋村庄屋 幸八 香住庄村屋 平三郎 片間庄村屋 六兵衛 丸谷庄村屋 四郎太夫 福居村百姓 直七 嶋村百姓 五郎兵衛 伊豆村百姓 善太夫 片間村百姓 弥七 三木村百姓 伊右衛門 丸谷村百姓 利兵衛 下鉢山村百姓 七右衛門 大谷村百姓 十兵衛	嶋村庄屋 幸八 香住庄村屋 平三郎 片間庄村屋 六兵衛 丸谷庄村屋 四郎太夫 福居村百姓 直七 嶋村百姓 五郎兵衛 伊豆村百姓 善太夫 片間村百姓 弥七 三木村百姓 伊右衛門 丸谷村百姓 利兵衛 下鉢山村百姓 七右衛門 大谷村百姓 十兵衛	嶋村庄屋 幸八 香住庄村屋 平三郎 片間庄村屋 六兵衛 丸谷庄村屋 四郎太夫 福居村百姓 直七 嶋村百姓 五郎兵衛 伊豆村百姓 善太夫 片間村百姓 弥七 三木村百姓 伊右衛門 丸谷村百姓 利兵衛 下鉢山村百姓 七右衛門 大谷村百姓 十兵衛	嶋村庄屋 幸八 香住庄村屋 平三郎 片間庄村屋 六兵衛 丸谷庄村屋 四郎太夫 福居村百姓 直七 嶋村百姓 五郎兵衛 伊豆村百姓 善太夫 片間村百姓 弥七 三木村百姓 伊右衛門 丸谷村百姓 利兵衛 下鉢山村百姓 七右衛門 大谷村百姓 十兵衛	嶋村庄屋 幸八 香住庄村屋 平三郎 片間庄村屋 六兵衛 丸谷庄村屋 四郎太夫 福居村百姓 直七 嶋村百姓 五郎兵衛 伊豆村百姓 善太夫 片間村百姓 弥七 三木村百姓 伊右衛門 丸谷村百姓 利兵衛 下鉢山村百姓 七右衛門 大谷村百姓 十兵衛
--	--	--	--	--	--	--	--	--

右此者共十月十五日之夜嶋村道場江相集、出訴之願申固、連印等致、尤右連印不得心之者も有之ニ付、於其席、火中致候由、同十六日福居村田和へ罷出、十九日二十日鳥居村川原江押出可相願段、相印相図刻限等之義迄申合、居村江申談候義、全村々之頭取り候ニ付、手鎖申付候事

村方之頭取、詮義之上及白状候、右首鎖申付候庄屋共同罪之義ニ候得共、全多分ニ付候取斗り少々罪憚

斗、此度一件も寄合之席江不罷出、尤詮之上(譲脱)、右催承り候義及白状、取鎮も不仕、頭取同前之始末ニ付、手鎖申付候事

右此者義、老年ニ付、勤筋之義も過半忤十右衛門取斗、此度一件も寄合之席江不罷出、尤詮之上(譲脱)、右催承り候義及白状、取鎮も不仕、頭取同前之始末ニ付、手鎖申付候事

右此者義、老年ニ付、勤筋之義も過半忤十右衛門取斗、此度一件も寄合之席江不罷出、尤詮之上(譲脱)、右催承り候義及白状、取鎮も不仕、頭取同前之始末ニ付、手鎖申付候事

右此者義、老年ニ付、勤筋之義も過半忤十右衛門取斗、此度一件も寄合之席江不罷出、尤詮之上(譲脱)、右催承り候義及白状、取鎮も不仕、頭取同前之始末ニ付、手鎖申付候事

右此者義、老年ニ付、勤筋之義も過半忤十右衛門取斗、此度一件も寄合之席江不罷出、尤詮之上(譲脱)、右催承り候義及白状、取鎮も不仕、頭取同前之始末ニ付、手鎖申付候事

右此者義、老年ニ付、勤筋之義も過半忤十右衛門取斗、此度一件も寄合之席江不罷出、尤詮之上(譲脱)、右催承り候義及白状、取鎮も不仕、頭取同前之始末ニ付、手鎖申付候事

右此者義、老年ニ付、勤筋之義も過半忤十右衛門取斗、此度一件も寄合之席江不罷出、尤詮之上(譲脱)、右催承り候義及白状、取鎮も不仕、頭取同前之始末ニ付、手鎖申付候事

右此者義、老年ニ付、勤筋之義も過半忤十右衛門取斗、此度一件も寄合之席江不罷出、尤詮之上(譲脱)、右催承り候義及白状、取鎮も不仕、頭取同前之始末ニ付、手鎖申付候事

右此者義、老年ニ付、勤筋之義も過半忤十右衛門取斗、此度一件も寄合之席江不罷出、尤詮之上(譲脱)、右催承り候義及白状、取鎮も不仕、頭取同前之始末ニ付、手鎖申付候事

右此者義、老年ニ付、勤筋之義も過半忤十右衛門取斗、此度一件も寄合之席江不罷出、尤詮之上(譲脱)、右催承り候義及白状、取鎮も不仕、頭取同前之始末ニ付、手鎖申付候事

田立村百姓 新九郎  
下鉢山村百姓 忠兵衛  
大谷村百姓 甚次郎

右此者義、十月十六日福居村田和江罷出出訴之申談  
仕候得共、発端ニ無之、庄屋共申談を請、罷出候者  
共、又ハ堀村々兩人ツ、罷出候者ハ重きもの江手鎖  
申付候間、此もの共證義之上、委細ニ相分り候ニ付、  
追込申付候事

中谷村庄屋	八郎左衛門	一牢舍
同村百姓	久兵衛	一首鎖
与惣兵衛		五人
次右衛門		一手鎖
久兵衛		拾四人
一		一追込
一		拾三人
一		三拾五人
△ 出訴之村数		
大谷村	福居村	伊豆村
三木村	片間村	丸谷村
田立村	安良村	

覺

香住村

上鉢山村

下鉢山村

ノ 拾弐ヶ村

中谷村

都合 拾三ヶ村

右十一月十一日迄十六日朝迄詮義中、彼是入組之義、  
荒増相決候品、右之通御座候、以上

西村平八郎家文書

巽 下郷拾三ヶ村一揆書留

(表紙)

下郷拾三ヶ村一揆書留  
口小野村大庄屋 西村弥兵衛記  
一十月十五日出勤仕、於御役所ニ御代官様江申上候者、  
田立市三郎、宮内義右衛門召連罷出候様ニ被仰付候、  
則町宿乃其趣并村々心得違無之様、村々末々迄得斗  
被申付、べり能御心得可有之やう申触候、直ニ私宅  
ヘ引取り私宅迄廻文仕候者、明十六日四ツ時揃ニ私  
宅ヘ村々御揃可被成候、急御用筋直談申度由申触候、  
十六日十四ヶ村庄屋中被相揃、則都而下分心得違有  
之騒ヶ敷由承知致し申候、全ク有之間舗義(義以下同)ニ存候と  
段々押而申談候処ニ、庄屋中納得仕、隨分べり能可  
申談候由ニ而何れ茂立退申候、頗而此十六日之夜、  
出石組之中ニ騒敷義御座候由、十七日てまへ出町御  
城下表ニて承り申候、則御役所ヘ罷出、尤市三郎・  
十右衛門兩人同道仕候、則御代官様ヘ昨日組合庄屋  
私宅ニて寄合申談候趣一々言上仕、此刻右兩人御座

列揚其上御収納之□半加取候様ニ被仰付候趣、村々  
ヘ段々申触候、其外憚御用等申上候、則御代官様御  
意被成候ハ、下分鬼角彼是如何敷相聞申候由、就夫、  
明後十七日惣代として上鉢山名代ながら十右衛門、  
田立市三郎、宮内義右衛門召連罷出候様ニ被仰付候、  
則町宿乃其趣并村々心得違無之様、村々末々迄得斗  
被申付、べり能御心得可有之やう申触候、直ニ私宅  
ヘ引取り私宅迄廻文仕候者、明十六日四ツ時揃ニ私  
宅ヘ村々御揃可被成候、急御用筋直談申度由申触候、  
十六日十四ヶ村庄屋中被相揃、則都而下分心得違有  
之騒ヶ敷由承知致し申候、全ク有之間舗義(義以下同)ニ存候と  
段々押而申談候処ニ、庄屋中納得仕、隨分べり能可  
申談候由ニ而何れ茂立退申候、頗而此十六日之夜、  
出石組の中ニ騒敷義御座候由、十七日てまへ出町御  
城下表ニて承り申候、則御役所ヘ罷出、尤市三郎・  
十右衛門兩人同道仕候、則御代官様ヘ昨日組合庄屋  
私宅ニて寄合申談候趣一々言上仕、此刻右兩人御座

敷へ被召、段々兩人へハ取りゞり之趣被仰聞、謹而畏り兩人も私共も引取申候、

一十九日夜九ツ過凡八ツ時ニ御城下ヲ飛脚、其意趣ハ鉢山辺以テ之外騒動致ス由、早速罷越、相納リ申様ニとの義、私共早速承知仕出立仕、先田立村ヘ罷越、荒々通り筋村方之様子相窺候処ニ、何とやら心得難き村方そぶり、夫ガ庄屋市三郎へ家来ヲ以て案内為致候処ニ、早速市三郎出向申候故、村方之ゞり能取り納被申之由、尤村方之様子何とやら心得かたき様ニ存候間、組頭中へも被申談候而村方ゞり能、縱村之者共罷出ル趣たりとも、押シテ可相留候、拙者安良ヘ罷越候と申捨、罷出候、則安良弥右衛門へ家來共ニ案内為致候処ニ、弥右衛門善光寺前迄出向申候ハ、御家來被下候ニ付、村方家々遂見廻り申候処、宅ニ居申者も□□又宿ニ居不申者も御座候と申候、□又ゞり能、組頭ヘも御談候而老人茂□□散し不申候、最早余程罷出候と申候、夫レハ何共不得其意候、

△此旨申聞、直ニ上鉢山ヘ罷越申候、上鉢山庄屋六左衛門ヘ罷越、右兩村ニテ申談候趣、尤兩組頭をも呼寄、村方ゞり程申談候而、是下鉢山・香住へ人遣し吳候様ニ申談、此兩人へも村方ゞり之程得斗心付ケ、騒敷義無之様、尤人も外へ出し不申之様ニと申口し、尤村方程々納リ候ハ、三ヶ村庄屋中田立辺へ可被罷出候趣申談、則上鉢山ヲ罷出候処ニ、早村はづれへ大勢打連、既ニ倉見橋詰上迄罷登申候、私共是ハと扱上鉢山ニ而相替候義無之、尤私共何も不承候由ニ而、先ハ落付キ罷出候処ニ右之仕合、尋入直ニ家来ヲ途中ヲ上八山ヘ戻し、□□之義、扱々言語同断之仕合、其元も私も同様出ぬかれ候哉と存候、先ハ指押ヘ可被引戻候と申捨ニ人□□安良ヘ罷帰り申候処ニ、弥右衛門前ニ而安良・田立兩庄屋ニ逢申候而、如何と相尋申候処、兩人被申候ハ、扱々無是悲次第ニ御座候、私共等式人手も足も相不申難儀仕候、

此式ヶ村之義ハ御兩人へ得斗ヅリ之程申談置候処ニ、左様之義有之間敷義、何とも心得難存候、併此詮義(義)何之益無シ、御兩人共一足も早ク可被押留候、一寸も先ヘ出シ候而ハ大事之義ニ候、尤各之御身之上ニ成り申候と申、則兩人留メニ被參候、夫々安良弥右衛門家来ヲ相頼、上鉢山へ遣し申候、上鉢山・下八山・香住村方粗相納り申候ハ、庄屋中田立へ指して可被罷出由申遣、直ニ田立迄私モ引取り申候、追付下三ヶ村庄屋中参り被申候而、私共ニ被申候者、最早如何様ニ仕候ても相叶不申候、不及是悲、皆々罷出候と被申候、其時市三郎・弥右衛門兩人罷帰り候ニ、如何と相尋候処ニ、兩人被申候ハ、先ハ嶋辺ニ差留置申候と被申候、先ハ珍重ニ存候得ハ私共御城下ヘ罷越、右之趣□□右不都束ながら先差被押へ候□□申達と談シ之折から、兩鉢山・香住之者共大勢安良々伊豆村往還筋櫛之はを引ことく段々嶋辺指して登り申候間、右五ヶ村庄屋共へ申付、何分如何様

ニ致シ候而も指留候様ニ申捨、直ニ私共ハ田立村々野道通りを宮内へ移り両庄屋へ相尋申候処、金右衛門ハ早く出町之由、義右衛門ハ村方ヅリ仕候、依之市郎右衛門ニ相対致シ、若往還筋水上辺迄も下村々出来り候ハ、何分さざへ可給候由申談、尤□□宅森尾両庄屋・同小野谷藤二郎・私恃彼是へ宮内ヲ飛脚ヲ遣シ申候而、夫々直ニ御城下裏通りヲ往、御役所ヘ罷出、御代官様江右之趣申達シ直ニ引取、町宿へ立寄り申候処ニ右五ヶ村庄屋中参り、則様子承り候処ニ弥不得止事を、嶋村辺ニ差集り居申候由申候故、何分夫迄ハ無拋事ニ候、併御願之筋有之ハ法ニ不過義ハ隨分申達可遣候程ニ、庄屋中々勘弁ヲ申聞早速引取候様ニ可被致由申付ケ町宿ヲ押シ返シ遣申候、尤宮内金右衛門ヲも何角と掛け引申談、五ヶ村庄屋中後を追而遣シ申候、私共御代官様御宅へ立寄候跡、御代官様ニも御宅江御引取被遊候事、右御達シ申、直ニ往還江差て金右衛門同道ニテ罷越し申候、

一此時廿日朝四つ前之刻、往還喜市新田之辺へ出張居申候、其時宮内若宮河原へ大勢集り居申候事、右五ヶ村庄屋中金右衛門ヲ相加へ、兎角大勢ケ様ニ相集り居申候義、御上様之思召甚以不届キ千万之仕方、何分願之筋も有之候ハ、追而如何様ニも御慈悲之下り候様ニ取り持可申由、金右衛門を以て申聞候得共、曾而不聞届ケ誰、次第二人數相増候様ニ相見申候、私□暮前比々ハ嶋・福居都而小坂筋打込ニ罷成り申候由、則私共等も出石組両大庄屋一所ニ罷成り、長砂村辺之往還ニ陣取り熟談仕、差扣居申候、折々大勢之義故、騒立申候得共、何之惡言茂不申□、水上河原迄被遣被下候様ニと願候由、然レ共一寸ニ而も御城下近辺ニ罷成り候故、奉恐入、大庄屋共々外小庄屋共相かたらい始終ハそこニテ納り申候、其□□後ニ至りてハ森尾源太夫・三宅彦右衛門・奥小野藤次郎・私共伴新次郎・宮内村々は立替り入替り百姓中、其後立石庄屋・三宅組頭中・奥小野組頭・私村

る見舞之人、町方々大庄屋兩人并私共見舞之人引もきらず、段々と日も晚景ニ及申候、大勢の願之筋ハ取持庄屋を以て申候、兎角田畠皆損ニ候へハ御帳之趣、尤畠方は御心付ケ被下候様ニ、只今御返事承知仕度旨申達候、此方三人共承り、是ハ一向不承知之事ニ候、縱、重キ御役人様方□□御座候而も其旨宣御返事ハ御座有間敷候、まして銘々共左様之義いかで返事ニ可及、無体之申事ニ候、然共筋立御慈悲御憐愍被成下候趣、幾重ニも相願候義ハ、随分／＼昼夜ヲ訛ケす情こんを尽申達仕可遣候、尤御上様御慈悲之程ハ□知不申候得共、手抜なく相願可申候由、段々申遣シ候へ共唯大勢之義故、兎角談方行届不申哉、何之返事も不仕候、尤此所ハ最寄惡敷ニ長砂・水上辺之河原迄參り度申候得共、銘々此義相成り不申由、外庄屋へ堅ク申聞候、然ル其後大勢の申達候者、左様ニ御座候ハ、右両品被成下候哉之趣、尤彼是茂無く誰次第二近寄度様子ニ相見ヘ、何之筋相も

聞入レす、大庄屋共も此上致方無之候得ハ最早御達シ申上ケ一所見命之義、此時ニ至候、品ニ依而ハ引取り可申、併此儘ニ而御達シ申上ケ引取候ハ、乍恐御上様(生)如何様とも可被為仰付候、乍去り己々が成スわざとハ不申、大庄屋衆手短かなる取斗故、加様之次第二罷成候杯と、却而身之咎を指置私共等をうらみ可申候哉、先第一者、かゝる□の時こそ御奉公なれと踏しばり、後を見せず差扣申候、併段日暮ニハ罷成り、猶大勢ハ止事を不得、何とも仕方無御座、最早絶体絶命ニ候得共、今一応此趣御願之村々庄屋共江申聞、念相之上可申達と申談候と、金右衛門・十右衛門・藤次郎杯ヲ以テ申遣候處、良暫ク有而下分方答申候者、左様ニ御座候ハ、何分幾重ニも御慈悲厚ク被下候様ニ、両品之御願御取持被成被下候ハ、引取可申候と申越シ候、其時又大庄屋共も申候ハ、兎角先々も申候通法ニ不過義、殊ニ畠方之義ハ別而御願難申上由、唯々御慈悲御憐愍被遣之義

ハ随分／＼申達可遣候との詰開キ、此義ハ承知仕、既ニ大勢も引取り申候、右之村々庄屋共をもゞり之為ニ村々へ今夕之義ハ引取り、此上ながら又々心得違無之様ニ得斗申付ケ、明日ニも勝手次第可被罷出と申、取持之庄屋中同道ニ而大庄屋共も先ハ品よく引取申候、直ニ御代官様江罷出、今日之次第一々言上申、其上宿々へ罷帰り申候、尤御代官様方ニも御同役中様不残岩田六右衛門様御宅ニ御詰被遊候、銘々引取り之御達シ仕候とノ存や、御代官様方御屋敷江御上り被遊候様との御事と承り申候、夫々無程御屋鋪カ大庄屋共ニ罷出候様ニと御使被下候而則上り申候、則於御屋鋪、御代官様御兩人様御意被遊候ハ、先刻引取刻、今日之次第、一々承知申候得とも、皆々も心せき次第、間違茂有之間敷義ニ而も無之候間、今一応得斗為咲候様ニ御上カ被仰聞候間、真直ニ今一応得斗為咲候様ニ御上カ被仰聞候間、真直ニ今第申上候事、大庄屋カ申上候ハ、為念右村々へ今夕

廻文仕置、可然様ニ奉存上候哉と窺申候処、可然ニ落、則下書仕、御披見ニ入候処、文言尤之義ニ御意あり則御屋敷ヲ下リ候節、夜ル九ツ過刻宿へ帰り、

直ニ廻文認メ、飛脚以而互ニ触下へ差出シ申候、文言ニ曰ク

今日者段々御苦勞ニ存候、然者先刻済口之様子罷帰り具ニ御代官様江奉申上候間、左様ニ御心得可被成候、村々願筋尚又得斗御承知之上、明早朝御越可被成候、万事其節可申談候、以上

橋本小左衛門

十月廿日

芦田又右衛門

多根太郎左衛門

西村弥兵衛

田立村

安良村

上鉢山村

下鉢山村

香庄村

右村々御庄屋中

右之通り之廻文、夜八ツ過ニ出シ申候、翌廿一日村々庄屋中罷出、御願之品段々申談候処ニ、又候下辺

如何敷義候様、尤御代官様ニも御役所ノ御宅へ御帰り被遊候、依之小左衛門殿・又右衛門殿・私申合セ候而庄屋中へ、先在々へ引取り、若騒敷有之間敷義ながら、何等之品も候ハ、早速取斗、得斗相納可被申候、願書ハなぞか候ハん事ニ而候と申、両組共庄屋中為引取候、既ニ晚ニ罷成り申候而其日者願書之下も出来不申候、將亦同廿二日者夜明ケ七ツ時ニ願書下書細見十左衛門取次ニテ私共斗リヘ被見セ候得共、以之外文言悪敷、得斗申聞戻し申候、明て廿三日之朝迄暮後迄ニ下書を致し、私共ニ見セ申候処ニ、先ハ大概者品よく出来申候、傍、御代官様ヲ御好ミ被遊候願之下被仰聞候、此御文言ニいわく、

乍恐奉願上口上之覚

一此度下郷百姓共心得違之仕方乍恐、御機嫌程恐入

奉存上候、併当年柄之義ニ御座候間、厚御隣惑之

御慈悲ヲ以、永御百姓取続居申様、偏奉願上候、

右願通被為仰付被成下候ハヽ、生々世々難有仕合

奉存上候、以上

明和五年

判人之義、此度御願仕候五ヶ村庄屋組頭百姓代長百姓都御請狀ノ表、名印之趣相勤申

候請取証文印委御さ候、請文之義ハ、差申候

子十月

候請取証文印委御さ候、請文之義ハ、差申候

岩田六右衛門様

白田八左衛門様

右ハ相認庄屋中名印ニテ差上ケ申候得共、則組頭百姓代ニも判為致候様と被仰聞候故、同廿三日晚かた

各村々へ飛脚ニ而右判人組頭百姓代呼寄、相揃申ニ

而則右願書相認メ差上ケ申候、凡其日も晚景ニ相成

り申候、大庄屋共小左衛門又弥兵衛打寄り居申候処

ニ、暮六ツ前ニ廿三日ニ而御座候事御屋鋪御役所より御

使ニテ、小左衛門二人唯今罷出候様、被仰下候而則兩

人罷出申候、御代官様御老人御意被遊候者、明廿四

日五ツ時ニ此度及御願ニ候村両組ニテ十五ヶ村ハヽ、

庄屋組頭御百姓惣代長百姓共惣而御請狀之表ニ名印

之趣罷出可申様、御檢見相願候村之内、此度御願ニ

及不申村ハ庄屋斗、皆無相願候村も庄屋斗、自分宅

ハ可罷出候由被仰付、奉畏直ニ宿元へ罷帰り、則向

々飛脚以テ申遣候事

一右廿三日御屋敷江大庄屋兩人被為召候前後ニ、大庄

屋小左衛門・同又右衛門・同弥兵衛及熟談候、意趣

者綻此度以て御隣惑ヲ御慈悲下り候共何とも奉恐入

候御儀ニ御座候、然者何卒仕方者有之間鋪義哉と乍

不及三人者共色々と至極之内分勘弁仕見申候処ニ、

頓而右御召被遊候故、先ハ差扣ヘ申候、既翌廿四日

惣人數被為召候御事、先ハ銘々熟談茂差止メ罷有候

事

一廿四日右之人數被為召候而 御慈悲之上、為御救米

と、御米六百七拾石ハ兩組江被為成下候、右之外、

為御褒美と、左之者共御米被為成下候覺、

一御米三俵宛

宮内村

金右衛門

右者此度出<sup>(種)</sup>情殊村方能相納候故、細見村  
是ヲ彼為成下候由、段々御懇成  
ル御意ニ而御差紙頂戴仕候事

一御米老俵ツ、

右者此度能取斗、品よく相納り

候由、已來逆も組合

方ハ不□

斗此上宜相心得□と村々へ心

付ケ可申との御事

新次郎義大庄屋共内分ニ而段々

申出候旨使之趣、致方無之、六  
ヶ敷事杯無落も申伝候義、念入

□との御事

立石村 権右衛門

奥野村 藤次郎

口小野村 新次郎

細見村 喜右衛門

鳥居村 藤五郎

三木村 岡次右衛門

森尾村 彦右衛門

源太夫

立石村

権右衛門

三宅村

彦右衛門

森尾村

源太夫

立石村

権右衛門

三宅村

彦右衛門

森尾村

源太夫

立石村

権右衛門

三宅村

彦右衛門

立石村

権右衛門

三宅村

彦右衛門

白田八左衛門様

岩田六右衛門様御宅ニ而被仰付候、

岩田六右衛門様御宅ニ而被仰付候、

岩田六右衛門様御宅ニ而被仰付候、

白田八左衛門様

右之趣者

岩田六右衛門様御宅ニ而被仰付候、

岩田六右衛門様御宅ニ而被仰付候、

岩田六右衛門様御宅ニ而被仰付候、

岩田六右衛門様御宅ニ而被仰付候、

岩波半右衛門様

岩田六右衛門様

岩田六右衛門様

岩田六右衛門様

岩田六右衛門様

西川惣左衛門様

右御三人様御会合ニ而被仰出候、

右被仰付候後、御褒美被成下候者共斗り御礼為相勤候事、右之外村々庄屋中惣代ニ組頭老人ツ、同御百姓老人ツ、召連、大庄屋共三人御礼相勤申候、

御郡奉行様方

岡部長左衛門様

森川岡右衛門様

工藤仁兵衛様

御郡御目付様方

太田市右衛門様

亀井十郎左衛門様

御代官様方

竹村次郎右衛門様

岩波半右衛門様

岩田六右衛門様

中村喜左衛門様

西川惣左衛門様

右御方様御礼相勤申候、廿四日御礼相済候節ハ甚晩景ニ相成、同廿五日金右衛門・十左衛門・岡次右衛門・

藤次郎杯ヲ以而、被為成下候御米割合之義段々相談シ

申候、尤大庄屋三人之了簡相済罷在候ヘ共、村々納り

之ため態右者共ニ及談被申候様との義ニ候、先此度之

被成下物ハ、御隣惑之上之義ニ候得とも、併何ぞを片

取申候得ハ、先ハ八歩斗リニ当リ候様ニ内分御意も御

座候故、先々被成下候歩相打込、八歩ニ相割可申哉と

も談候ヘ共、是逆も高下御座候故、始終ハ別紙扣置候

通ニ割致、双方庄屋中江取り持衆より内分見セ申候處ニ、

何れも納得仕候由、然レ者割合之右数ヲ書付、村々願

書之名印ニ而請取証文為差出候而披露申候處ニ、弥少

しも申分無御座候由ニ而、廿六日中尤大庄屋中打懸り、

同廿六日之夜九ツ過ニ右証文差出、余り夜更ケハツ過ニ相成候故、翌廿七日朝早くニ大庄屋中并取持申候十

事

左衛門・金右衛門双方惣代として彦右衛門、岡次右衛門・藤次郎義ハ別段ニ何れも罷出、尤割合書付ケ持參差上ケ御礼相済申候、尤先廿四日右之趣御代官様ニ而被仰付候而引取り候節、大庄屋中少し懸り合候而、佐々木太郎左衛門共取持庄屋共弥兵衛宿米屋与平次へ寄合、夕飯相賄申候、同廿六日割合熟談之節、大庄屋小左衛門私共取持庄屋共十左衛門・金右衛門・藤次郎・岡次右衛門共、暮九ツ時より米屋与平次ニテ右人數割合仕、同日夜八ツ過迄ニ相済申候、翌廿七日朝早夫ニ大庄屋兩人右之人數米屋ニ而賄仕候事、同廿七日晚より廿八日朝迄ニ御奉行様方御代官様方へ御暇乞仕、始終ハ通ニ割致、双方庄屋中江取り持衆より内分見セ申候處ニ、

廿日晚七ツ前より廿八日之晚迄相詰罷有候而引取り申候事

下郷  
武拾六ヶ村

当年柄ニ付、御慈悲筋相願承届ケ候、以御憐愍別紙

之通、御米被成下候事

子十月

覺

一御米六百七拾石

右被成下候事

右之外、為御褒美人々江御米被成下候者皆々御差紙

也、

此文写扣有ル也、

覺

一□□七拾三石九升三合

宮内村  
坪井村

一百九石三升六合

三宅村  
立石村

一五百廿七石戸斗壱升六合

立石村  
メ千五百三拾壱石三斗九升戸合

御褒美御米戸拾石ヲ此四ヶ村へ割遣ス、

此曲尺壱三〇六ノ割也、

米戸拾石

内

一御米八石七斗九升壱合

宮内村へ当り

一御米壱石四斗戸升四合

坪井村へ当り

一御米六石八斗八升五合

三宅村へ当り

一御米戸石九斗

立石村へ当り

メ戸拾石

右ハ御代官様江御内窓仕候上ニ而、請高ニ割、右四ヶ

村江相渡候者也、

子十月廿九日

同卅日五ヶ村庄屋中私宅へ呼寄、御取納之義別而其村

々杯ハ格外ニ出精仕、縱戻揚いた相済不申とも、出

来米何程持寄、此外才覚ヲ以テ銀納仕候と申献立さへ

各々村方御百姓熟談之趣ニ候ヘハ、私共立ふさかり、

或御取納御会所へ申上、又ハ私とも呑込請合申、彼是

と手達を以、何分延引なく御定日ヲ甚おくれ不申様ニ

御取斗可成候、左様も御座候得ハ重キを憚り御免も可

有之様ニ乍恐奉察上候と、段々申聞候事

## 五 村の生活

一下郷兩組廿六ヶ村江被為成下候御憐愍、御米六百七 拾石、此割別紙目録ニ有り	一 同三拾武石壱斗壱升九合 前 嶋村
一 御米拾六石九斗五升四合	一 同八拾三石八斗五升九合 伊豆村
一 同拾四石七斗二升六合	一 同四拾四石六斗六升三合 片間村
一 同八拾五石武斗壱升七合	一 同五拾三石九斗壱升武合 三木村
一 同武拾九石武斗六升	一 同六拾三石八斗三升五合 大谷村
一 同五拾五石五斗九升五合	一 同拾壱石三斗九升七合 丸谷村
一 同拾五石六斗七升三合	一 同五石九斗壱升五合 森井村
一 御米四石四斗九合	一 同七石七斗武升七合 尾崎村
一 同廿九石五斗三升壱合	一 同拾五石九斗四升三合 鳥居村
一 同□石九升	一 同武石壱斗八升五合 細見村
一 同耄石八斗壱升六合	一 同三石九斗武合 荒木村
一 同七斗武升三合	
一 同四石武斗七升	
一 同五石九升耄合	
一 同三拾五石耄斗六升四合	
一 同四拾五石三斗八升四合 後	
福居村	
奥野村	
口小野村	
袴座村	
坪井村	
宮内村	
橋本小左衛門殿	
右者此度以御憐愍御米被為成下、御内談之上割合之 通少茂申分無御座候、為後日仍而如件、	
明和五年子	右之村々 此度願村々は庄屋組頭百姓惣代長百姓 名印
十月廿五日	此度願不仕村々ハ庄屋斗り名印

芦田又右衛門殿

西村弥兵衛殿

右之通之文言ニ而、請取連印証文兩組共一通ツ、  
取り置申候事

里 當申年凶作二付、來ル酉年家内向儉約規定之事  
『諸事扣』 平尾源太夫家文書

一盆酒・さなほり酒致不申事

一祭礼之節も、朝壹度小豆飯、其外雜飯ニ致し候事  
一祝義(儀)仏事之節も、親類子方共寄集義(儀)、堅不致事

一家内向勺酒も茶わんニ老人ニ老杯つゝ、正月之内五

節句とも右同断、

一主人下人とも皮はなを雪駄、下女髪かさり、鹿子類、  
堅無用之事

右之通堅相守り可申事、其外諸事何事も右ニ相順し儉

約堅可相守事

天保七年十二月

平尾源太夫定メル

右之趣、申十二月十三日夜、村方・子方・下人迄不

生酢(大根・鰯)外ニ數之子 汁(大根・鯨)  
平(大根・牛房・田作り) 雜飯

献立

一親類子方之内、少分之品たり共、式季歲暮取遣致問  
敷事  
一親類子方之内、年玉少分之品たり共、取遣堅不致事  
并ニ年頭五節句朔日廿八日礼式、応ニ可致事  
一正月元日朝白飯其外三日之内雜飯ニ可致事

并五節句も右同断、

一他向親類向子方年頭之節

御酒者(但し、小盃ニ老順廻し漬、其上茶呑茶碗ニ)老人ニ老杯ニ限り申事

一田植植そめ之日、昼老飯白飯、其外ニ早稻・晚稻田植も雜ニ致候事、并老人ニ茶わんに老杯つゝ昼出かけニ呑可申事

## 四〇 規定（森尾村）

『諸事控』平尾源太夫家文書

斗可申事

一右之規定ヲ背申候もの有之候ハ、科料受取直ニ村中

老人宛寄集、酒をもとめ呑可申候事

右之通、常々相心得慎可申事

天保四年

巳四月

森尾

村中

一野作莫物等荒申候もの者科料札拾五匁、組親ニ受取庄屋持参候事

一野荒之人見のかしニ致候人有之候ハ、科料五匁、組親ニ受取庄屋江持参申候事

## 四一 優約規定之覺（諸事控）

平尾源太夫家文書

一組親之人野荒致し候ハ、組子ガ科料受取庄屋江持参申候事、但、十五歳岁以下は科料用捨、親作人江相詫可被申事

一林山江入、竹木等伐盜取申候ハ、道具取上、科料三匁受取式品共庄屋へ持参之事

一林山江入、拾木者なた・かま之類無用之事、若持入候ハ、直ニ見付次第取上可申事

一牛野作喰候ハ、直ニ作人江相わひ可申事

一仕置申候竹木盜取候ハ、野作荒申候人と同様ニ取斗可申候事

一若家之物之もの盜取申候者有之候ハ、野荒同様ニ取

年玉益取扱無用之事

一下人給米之儀者頭男女給米直段六拾匁ニ相極、村々減給者相對仕直段ヲ以取極可仕事

一女出替り之義者(儀)以下同二月朔日ニ出、同月九日ニ入、八月朔日ニ出可申候事

一歳暮物一切取遣無用之事

一大年是迄之通ニして質素ニ取斗可相勤候事

一元朝祝老飯者其人之心持之御飯ニして、三日共飽食之事、但し、しみ内共右ニ応シ候事、并年始之節、(注連)

一五節句共朝壺飯者白飯、跡兩度者常体之龜飯、且又男女初節句進物等堅々無用之事

一氏神祭礼之節は朝者心持小豆飯、其余ハ常体ニ酒肴

取遣無用之事

一大工木挽桶屋之儀者、作料壺々式分、喰物之儀其時之内之喰同様ニテ取斗可仕候事

一草屋根屋之儀者作料者九分、喰事之儀者同様之事

一日雇手間代六分五厘ニ定、喰物之儀者常体之事

一女中日雇之義者手間代三分ニ相定メ候事

一田植日雇手間代老ぬ、喰物常体、尤中飯も雜飯ニ而

取斗可申候事

一婚礼之節一汁二菜ニ而御酒三獻ニ相限り夜ル四ツ時

限り相仕舞、若延刻ニ相成候得者村役人ヲ急度及沙

汰候事亡

一死門之節、香典米五合ニ而喰通ニ而是迄之通り世話

可致候事

申 十二月

### 四三 地狂言演者処罰『御用部屋日記』(文政五年)

一御郡奉行達、

左之通、於評席申付候由、

(其村方山神祭礼之儀以下同付是迄仕来出石郡山之中

之笛囃子柳之舞等者格別、歌舞伎

狂言類之義ハかたく可為無用旨先

達而申触、其後小役共差出、得斗

申談、尚又御代官名戱敷申渡置、

其上其方共ヘ小役名精々可為無用

旨申談、承知乍致、押而相催し候

段不念之上大胆之至、重々不届至

極、申付方も有之候得共勘弁を以

不及其沙汰、手鎖申付候由

(右同断、其方とも村役を茂乍相勤、同村庄屋

若キものとも申談、不行届候之義

不都束之至ニ申付方も有之候ハ

共不及其沙汰、追込申付候由、

(其村方盆中仕来之踊者格別、歌舞伎狂言類之義ハ堅く可為無用と先

下郷細見村甚

七

利八

太右衛門

組頭

弥三郎

次郎左衛門

久兵衛

惣左衛門

十次郎

重々不届至極ニ候、申付方も有之  
候へ共不及其沙汰、手鎖申付候由、

甚次郎

右御答  
柴木斗之入会ニ而、斧遣之儀古來仕来リニ無御  
座旨申立候得共、町方之者斧遣相成不申と申儀承  
り不申候、申伝ニ而承居候者元來右山之義者茂り

○庄屋も叱られるが「其沙汰ニ及バズ」と許される。  
八月二十三日赦免

## 5 山 論

### 四三 上野村枝郷百合と争う出石惣町中の返答書

川見義昭家文書

乍恐奉差上返答書之覚  
今般上野村枝郷百合之者共往古仕来り之儀相妨、  
惣町方相手取、奉出訴仕候ニ付、返答書被為仰付、  
乍恐、左ニ奉申上候、

一当村方百合谷薪刈場之儀、先年より出石町内茂柴木斗  
之入会ニ而、斧遣之儀古來仕来リニ無御座候處、

当月七日町方之もの共割木材木百合谷江持出候ニ付、  
早速見咎メ候処、百合谷ニ而者伐取不申、越山ニ而  
伐取候様申候、然処尾越に者当村伊兵衛と申者之持  
山有之、近來町方より伐荒し難渋仕井奥山若荷谷之も  
の之持山ニ而も町方之者伐荒し、是以難渋仕候へ共、  
持帰候節者、百合谷へ持出し候義ニ付難捕、見當り  
次第相咎メ吳候様、兼々相頼來り候義も有之候ニ付、

弥尾越ニ而伐取候哉之段、及懸合候処、右町方之も  
の共又々申陳し、百合谷ニ而伐取候趣申候、右尾越  
盜伐之儀ハ勿論之義、百合谷迎も斧遣之儀ハ古來  
仕来リニ無之義ニ付、右割木材木持出シ候十四人之  
もの共之荷物差押ヘ申候処、其儘ニ而一旦引取申候  
処、

## 右御答

先月七日、百合谷ヘ山稼ニ罷越候処、十四荷之薪  
差留、其上若荷谷ヘ入込持林伐荒候様申立候得共、  
決而左様之者老人も無御座候、尾越ニ伐取候義申  
陳し候杯と申候得共、畠中山稼之義、可隠様無御  
座候申陳候と可相察候ヘ共、全左に者無御座、苅  
場幾谷も有之候故、多人数之者共方々江相わかれ、  
尾越ニ伐取候ものも有之、又は谷合ニ而伐取候も  
のも有之候、右を人毎ニ相尋候故、谷苅尾越苅と  
申答候義ニ而御座候、尤其節、被差押候十四人之  
内も、大人者一兩人、其余ハ子供斗ニ而御座候故、

申答候義も不行届哉ニ奉存候、決而於其場申陳候  
筋ニ而者無御座候、然処、此度町方之もの共江盜  
伐致し候杯と申懸候子細、不得其意御事ニ奉存候、  
先方々訴出候程之義ニ御座候故、定而慥成証拏等  
も可有御座哉、御糺被仰付被成下候様、奉願上候、  
無程同夜町方々何百人共難相分、夥敷人数追々罷越、  
段々理不尽而已申懸、就中川原町清兵衛と申者、其  
先ニ庄屋宅ヘ罷越申候者、是迄町分之山ニ候ヘ者い  
か体之義仕候而も不苦杯と不法申懸候ニ付、左様之  
ものニハ應対不仕、事分り候ものヘ懸合可申段申述  
候処、裏町勘十郎并川原町庄七と申者兩人罷出申候  
者、此上割木材木は不仕、是迄之通柴木斗刈可申候  
間、今日丈之荷物は見流し持帰らせ吳候様ニ及挨拶、  
何分ニも手を打吳候様申ニ付、任其意事済仕、右兩  
人門迄出候処、無程右兩人ニ多勢付添立帰、右兩人  
申候者、先刻之通挨拶申事済被下候ヘ共何れも不法  
申相治り不申候ニ付、無拋相断可申段申之、并右付

添入込候もの共も口々ニ申候而右荷物之義者相預け  
引取可申旨申候而一同一旦引取申候、然処馬場上當  
り迄も帰候と存候時刻、又候一同引帰し右荷物持帰  
り申候へ共、氣色を替強勢之体相見へ候ニ付、怪我  
あやまち之程も難斗候ニ付、村方之もの共差押へ出  
し不申候而其儘持帰らせ申候、

## 右御答

先月七日薪十四荷差押へ故障申懸ケ十四人之もの  
共差留、其夜五ツ過ニ茂相成候へ共、罷帰不申候  
ニ付、追々迎ニ罷越、如何之義ニ而今日薪荷物差  
留候哉相尋候処、先方申候者、昨日当村宗判ニ  
而ミやうが谷之者罷越候故、少々買山致度段、及  
相談候処、茗荷谷之者申答候者、百合の者へ者得  
買山不致候、其訛者百合の者ミやうが谷へ乗越、  
盜伐致候故、壳山不致候、夫とも買山致度候ハ、  
盜致候者捕差出し候様、申候ニ付、今日村中相休、  
荷物差留置候而、ミやうが谷之ものへ申訛相済候

上ニて、右荷物差戻可申由申候ニ付、川原町清五  
郎申述候者、町方十四人のもの取調候処、ミやう  
が谷へ乗越候もの老人も無之候、左様紛敷義之申  
訛ニ此方之荷物差留置可申筋、決而無之段、申答  
候処、先方申候者、割木材木へ伐出し候故、差押  
へ可申と直様申直候故、出石惣町入会場ニ而是迄  
伐出来り之儀、今日ニ限り如何之訛ニ而差留候哉  
と申候処、是迄は見受不申候と申候ニ付、夫は相  
濟不申義と存候、村中か持出候義、何れは見受可  
被申義と被存候段申候処、其処者大目ニ見候て用  
捨致置候と申候故、此方者入会野山ニ而伐出し候  
義、預用捨可申筋無之と申候処、先方申候者、此  
方之山ニ而此方差留候ニ故障無之筈と申候故、入  
会山ヲ此方之山と被申聞候段、甚以不得其意と申  
聞候処、百合之もの共申候者、左様不法申候もの  
者相手ニ不相成、事分り候ものへ懸合可申段申候、  
然處百合在源右衛門と申者、裏町勘十郎へ申入候

者、段々深更ニもおよひ候義、彼是不申と能位ニ  
挨拶いたし引取候様申出候ニ付、勘十郎并川原町  
庄七両人挨拶申入候処、百合在郷者納得仕候へ共、  
清五郎始此方之もの共者心決候通申聞候心得、両  
人之挨拶趣意違ニ御座候故、承知不仕候、全此義  
百合在郷と茗荷谷と彼是紛敷義有之候を町方之も  
の共へ引負セ、右様之義取斗候義と心外至極ニ奉  
存候、其上古來る仕来り之筋合申述候処、不法杯  
と申懸候段、甚以何如敷奉存候、其節之義者双方  
共多人數之事故、申事も口々ニ而理非相分り不申、  
双方言別レニ而罷歸り申候、

一八日町方之者申合ニ而も仕候哉、凡百三四拾人連ニ  
而入込、皆々割木荷ひ出し其上村内ニ而、色々悪口  
雜言申、荷物持帰り候へ共、強勢公事工(たぐら)ミと見請候  
ニ付、此上かさつ之処も恐敷、村方之もの共差押へ  
取合せ不申、依之乍恐其節書付を以奉願上候処、御  
聞済之上御慈悲を以、論中かさつ無之様、町分大庄

屋所へ被仰談被成下候趣、難有仕合奉存候処、町方  
之もの共不得止事、其後今以左之通ニ御座候事

## 右御答

町方之もの共申合も仕、公事工ミ仕候と相察し候  
趣ニ申出候へ共、左様之処思ひ不寄義ニ御座候、  
前夜之中分者双方不相分候得者山行不相成と申ニ  
も無御座候、其上次第ニ山芽立ニ相成候而者薪刈  
り取候義も難仕并田作手入最中ニ相成候故、一日  
成共相稼申度心得ニ而候へ者申合も不仕候へ共、  
大勢罷越候様、相成候義と被存候、尤過半御家人  
衆も御座候、其日義は、誰故障申懸候ものも無御  
座候故、前夜之義は言別レニ而相済候事と奉存候  
処、村中ニ而悪口雜言等申候様申立候へ共、相手  
も無之義、何を見當ニ可申様無御座候、其日者薪  
はかりを重ニ持帰、中ニ者割木伐出し候ものも御  
座候、右ヲ不残割木持出し候なと申立、是迄仕  
來り之義を妨申懸、色々偽を申餽り惣町方相手取、

御訴訟被相願候段、全百合在郷のもの公事を被工  
候古工と心底何共難得其意被存候、且又御上様へ  
右様御訴訟申上候程之義を此方へ者一応之通も無  
之、直様ケ様表立、御上様へ被訴出候段、何共不  
得其意御義ニ被存候、得斗理合被申間、双方難相  
分節者如何様共可被取斗義町方ニ而者右様之義と  
ハ夢ニ不奉存、引続山持等も仕候義、対御上様奉  
懸御苦勞候段、何共奉恐入候、

一九日より十五日迄七日之間、右同様割木丸木多勢罷  
越伐出し、殊更村内ニ而惡口申候者村中ニ男者無之  
哉、差留候ハ、今出ぬか杯と申、其外之雜言筆紙ニ  
難尽義ニ御座候ヘ共、村方之もの共堪兼残念かり候  
ヘ共、何分御郡中之義、奉対御上様へ恐入候義ニ付、  
先々堪させ見流し聞流し罷在候而無拋右御注進申上  
候処、

右御答

此ヶ条之趣吟味仕候処、元來百合在郷ノ新規を企、

故障申懸候事起り候義、誰申共なく町中ニ響候  
義と奉存候ヘハ御否哉不勘弁之もの申出間敷事共  
不被存、尤其日山行之分御家人衆も多被參、町方  
も多人数打交り罷通り候義故、何れガ申出候義哉  
此節ニ至り候而者相分り不申候、是全右ニ申上候  
通、先方ガ新規を企候段、町方之もの共ニおみて  
者心不善思ひ居候哉ニ被存候ヘハ、惡口申候程も  
難斗奉存候、先方申候通、惡口等申候もの御座候  
ヘハ、右様之中、甚以心得遣之義、其段者奉対御  
上様へ恐入候義ニ奉存候、

一十七日三拾弐三人斗參、右同様荷物持出シ候内、名  
前相尋候処、十七人のもの共名前者大切成もの故、  
村方之もの江は申事不致、御代官歟御小役衆歟是ヘ  
御出書記可被申義ニも候ハ、可申、無左候而は得不  
申と申切、荷物持帰り申候ニ付、其段御注進ニ庄屋  
先ニ罷出、村方之もの共者付添罷出候処、右のもの  
共左ニ而申候者、御代官者何れ哉と尋候ニ付、御懸

り横山様と答候處、左候ハ、右御代官江皆々可參  
申候ニ付、其段も早速御届ヶ申上候處、猶又其節御  
書付被成下候ニ付、右書付之趣、馬場上ニ而申間候  
處、左様之事者此方耳江者入不申、此方ニも支配頭  
御座候事故、御届ヶ可申杯と申、名前明し不申内、  
川原町吉次郎と申者罷越、此義ニ付、申分御座候ハ  
拙者引受御代官ニ而茂何ニ而も老人ニ而取捌可申  
間、不差構荷物持帰り候と申ニ付、弥強氣相募候へ  
共、右被仰付之義も御座候ニ付、是非々々相尋、名  
前書記引取申候、

## 右御答

右同日山行共之内、先ニ御家人衆四人荷物持出し  
候處、谷口ニ而差押ヘ名前相尋候ニ付、御家人衆  
被申候ハ、如何之訛ニ而名前相尋候哉と申候所、  
百合之もの共申候者、七日迄以来之始末斯々之次  
第故、御代官様々帳面ニ付留候様被仰付候事故、御  
名前承度と申候、御家人衆被申候者、左候ハ、此

方仲間内も帳面ニ留置可有之筈、長面見セ候様ニ  
(僕以下同)

申候處長面見セ申候處、是迄御家人名前付留無之  
候ニ此方は留さセ候事もいかか敷、今日ニ限り不  
申、明日も罷越候へ者支配頭へ相届ヶ明日罷越候  
節、名前可申聞候由ニ申聞候處、百合之者共申候  
者御面体并御宿元も存居候故、左様ならハ宜と申  
相添候趣ゆヘ、町方之のも引取窺可申方へ窺候  
上ニ而、名前可申聞候間、此旨納得いたし通し可  
被申と申述候處、先方々申候者、彼是六ヶ敷候ハ  
、御代官様へ此由可申上、左候へ者御小役御出し  
可被成と兼而被仰付置之義故、是々御代官様へ直  
ニ人遣し可申と申述、老兩人村方江引取申候、然  
處御家人衆者被帰、相残り候もの之内ニハ子供も  
有之、罷帰り度由申ニ付、一統通し候様申述候處、  
帰り度候ハ、名前さへ付留候ハ、何時ニ而も通  
し可申と申候故、御家人衆江者顔と家とさへ相知  
候ハ、宜と申候、此方も四丁町之ものニ相違無之、

通し候様申候処、左候ハ、此方る三、四人付添可  
罷越旨申候故、四丁町之ものニ相違無之儀、付添  
參候ニおよび申間敷段申断候ヘ共、夫ニ而者荷數  
相知不申、最早追付御小役衆も御出可有之由申ニ  
付、夫迄爰へ扣へ居候而者日も暮候故、左様なら  
ハ御小役衆へ透次第ニ致シ罷帰可申と申、馬場上  
迄罷帰り居候処、無程庄屋書付持帰り読聞セ候ヘ  
共、山持仕候程之もの左様之事は此方耳ニ入不申  
と、鬼哉角申内、町方へ相談ニ遣候もの罷帰り、  
名前付留させ候而も不苦趣申候故、不残名前付留  
させ引取申候、尤先方願書文面ニ町方之もの皆々  
御代官様へ可参与申文言御座候処、此義者先方る  
御代官様へ皆々参り候ニと申聞候義ニ御座候、川  
原町吉次郎と申者其場へ罷出、言葉添いたし候故、  
町方之もの強氣相募候様申出候得共、決而左様之  
了簡成もの無御座候、吉次郎義者職人之事故、此  
一件ニ付言葉ヲかけ候共取用ひ可申筋ニハ不奉存

候、町分御支配之もの御代官様へ右様之不都束成  
義可申上様無御座候処、御代官様へ対し不都束而  
已申出候様申上候段者、全先方事を工ミ候義、ケ  
様之次第心外至極ニ御座候、  
前条之通、追々多勢入込割木材木伐荒し、村方可立  
行處無御座、難渋至極仕候、

## 右御答

町方るいか程荷物伐出候而も右野山ニ而伐出候義  
ニ、先方村方之難渋申立候義者難相成義哉と被存  
候、前条奉申上候通、町方薪取場野山之儀者往古  
べ出石惣町入会場ニ而、年々山手御小物成上納仕、  
柴薪刈取、御百姓作人共農具等も相整、其外屋根  
草差支も無御座御事ニ御座候、既御家中様前度山  
行御家來被召抱、於御上様も御存知被為遊候御  
儀、然處今般百合在郷るすも登を材木と申立故障  
妨申懸候へ共、右野山へ生立候分御用木之外者伐  
取候而故障無之義と奉存候、却而百合在郷のもの

共者手近之義故、野山ニ而伐干等數多仕置候義共度々見受候ヘ共、是等之處大目ニ見置候得共、斯

故障申懸候ヘ者其儘難捨置奉存候間、此義御差留

被成下候様奉願上候、是又先方村方之義ハ出石御

城下ヲ以前ニ有之候哉、本村上野村者右入会場へ

為入込不申候處、百合入会仕候義者谷口ヘ出村仕

候故、自然と入会為致義と乍恐奉存候、前書ニも

申上候通、先前の仕来り、前書ニも無御

座候間、右之趣意被為聞召訛、往古ヲ仕来り通、

妨申者江以来故障不仕候様、以御慈悲、被為仰付

被成下候様、偏奉願上候、右奉願上候通、以御憐

愍御聞届ヶ被成下候ハ、惣町一同難有仕合奉存

候、以上

文化十一年

惣町惣代

戌四月

川原町

新兵衛

五郎兵衛

六ヶ村之者共及難儀候事勿論ニ候、右体之儀も不申達、  
旁に不念不都束至ニ候、依之見取場所并刈畠之分者相  
改残置、其余ハ不殘切扱是迄之通入会山ニ申付候、既  
ニ村差出帳ニも薪入会山と有之上者薪者不及申、松木

御月番御名主  
孫右衛門殿

### 四四 榎座村奥入会山・萱ヶ谷山論裁定書

袴狹区有文書

○以下各町代表一六名略。  
裏町 六 平

袴座村奥入会山ニ數十ヶ所年来新林仕、里六ヶ村之者  
共甚及難儀、無拋此度致出訴、先頃呼出し致相尋候處、  
右林出シ之場所ハ見取場并刈畠之分近年作物不出来ニ  
付、立林致候旨申達、新林致候者其節願差出、差図之  
上可致所無其儀、且又刈畠之儀者三、四年を限作物出来  
兼候ニ付、場所替等ハ可致之所、右之跡江段々育木仕  
置、外之場所新規ニ刈畠捨候而者入会之場所次第減少、

之外ハ芝草等迄刈取不申事、尤萱筐斗刈取候儀ハ數十ヶ年不致來候旨六ヶ村之者共申達、以來萱筐斗刈取り

候儀者可為無用候、勿論時ニより薪之内ニ筐萱等少々

相交り候義(儀以下同)も可有之候、右体之儀ハ差留候儀堅仕間舗

候、相手方村々も向後薪刈罷越候節、隨分筐萱等不取  
交刈取候様可致候事

一免状之内高式石五斗六升八合

此取大豆式斗五升 本烟之内見取と有之、

一村差出帳

烟六反四畝六歩 未新開 水帳ニ無御座候、

分米式石五斗六升八合

此取式斗五升ニ被仰付、年々上納仕候と有之、

一享保三戌年差出候名寄帳ニ本高之外新發

高式石五斗六升八合 見取場と有之、

右之通ニ有之上者免状之内見取場ハ本烟之内ニ無相違、

村差出シ并名寄帳ニ別ケ条有之上者、免状之外上納物

と相見候、上納之義ハ尚又遂詮義追(儀以下同)而可申付候、見取

場刈烟先規方之反別應残置余者切拵申付候、尤切拵候  
諸木之儀袴座村へ差遣候、

一萱ノ谷之儀、口小野村境より田立村境迄也、最初袴

座村前々々入会ニ無之由、相手村々々ハ古来方入來

候由、双方無証拠難相分ニ付、度々呼出シ遂詮義候

処、袴座村方申達候者、萱ノ谷前々々薪者六ヶ村入

会ニ相違無之候得共草之儀ハ前々決而為刈不申旨申

達候、左候得者袴座村者最初方之申口甚相違候、何

方ニ而も薪斗入会ニ而芝草斗差留候義ハ無之候、薪

入会場所ニ候ハ、芝草者勿論之儀ニ候、然者古來方

入会之場所ニ紛無之間、以來前々之通薪以下芝草等

まで、坪井村を除、袴座村共六ヶ村入会ニ申付候、

其旨可相心得事

右之通、今般双方江申付候条、急度可相守者也、

青木 半次印

明和二酉年五月十五日

森川岡右衛門印

坪井村

鳴村

福居村

田立村

安良村

伊豆村

可申付候事

一先年刈畑場ニ申付候滝川筋道下片屋うハ字こりせハ

山左右共砂山之義(儀)、致刈畑候而ハ弥砂流出候様相成

候ニ付、右之場所入会山ニ申付、右為代、先年荒ニ

申付置候見取場之内、荒地ニ而刈畑申付候、此度打

渡候定杭之外、少し茂切広不申、勿論入会之者とも

山入之節、荷擔等之儀、故障ニ不相成候様可致候事

(安永十年)  
丑四月

袴座村

鵠区有文書

癸丑 丑四月袴座村江被成下候御書

癸未 袴挾入会山議定之事

鵠区有文書

其村方川筋此間遂見分候處、夥敷砂流出、御田地故障ニ茂相成、難捨置候ニ付、此度御詮義(義)之上、滝川筋山

左右下通印杭之通、為砂留、立木為致候、依之人足三

拾人差遣候間、村方申合、砂留相成候様、右人足を以

致立木、伐採猥ニ不致、砂留ニ相成候心得ニ而万事氣

を付、御田地損し不申様、取斗可申候、尤入会之事候

間、外村方之者共罷越候節、故障等ニ不相成、右申付

置候外、堅ク立木等不致候様、村方之者江も常々得斗

為念書置候處、村々山儀相勸候節ハ、一ヶ村方壱匁

村々立会之上、議定仕、仍而如件、

宛之取計ニ議定相定候事

嘉永七年寅壬七月廿五日

安良村庄屋 弥右衛門

田多地組頭 新四郎

鳩村庄屋 忠兵衛印

福居村庄屋 七左衛門印

伊豆村庄屋 小八郎印

一米搗谷上ミ小口御物成場所有之、夫より上ミ五間通、

腰林印杭弐本入、

一猪之子岩下の谷道より林山まで、此度新規鎌留、  
右之通、立入之銘々村々并立会一同納得之上、規定仕  
候上者、永々故障無之候、依之為後年規定書如件、

大庄屋

(安政六年)

野村新兵衛印

同断

藤左衛門印

香住村文右衛門印

伊豆村

八月 取締

福居村庄屋

長兵衛殿

鳩村庄屋

惣右衛門殿

伊豆村庄屋

小八郎殿

安良村組頭

又右衛門殿

異七 覚（袴挟村奥の谷川に沿う地の印杭）鳩区有文書  
一才谷之儀者追而從御上様御差図被仰付候之儀ニ付、  
此度相改不申候事  
一才谷先下通刈畑場御座候、夫より先やせ尾迄三間通、  
新規腰林印杭四本入、  
一見舞谷上入口御物成場所御座候印杭六本入、奥者は  
げ境、其余不残伐払、  
一岩坪口を滝ノ谷まで東べら以五間通、腰林印杭拾弐  
本入、

一同所西べら以不残伐払、

一滝ノ谷北べら以五本松少シ上ミ小口をじざノ谷道境  
迄六間通、腰林印杭六本入、

一じざノ谷道境迄米搗谷上ミ小口迄七間通り、腰林印

杭三本入、

一米搗谷上ミ小口御物成場所有之、夫より上ミ五間通、

腰林印杭弐本入、

一猪之子岩下の谷道より林山まで、此度新規鎌留、

右之通、立入之銘々村々并立会一同納得之上、規定仕

候上者、永々故障無之候、依之為後年規定書如件、

大庄屋

(安政六年)

野村新兵衛印

同断

藤左衛門印

香住村文右衛門印

伊豆村

八月 取締

福居村庄屋

長兵衛殿

鳩村庄屋

惣右衛門殿

伊豆村庄屋

小八郎殿

安良村組頭

又右衛門殿

## 5 山 論

田多地村莊屋  
坪井村莊治郎兵衛殿  
三郎右衛門殿